黒竜江省河川地名考

藤　島　範　孝

1

黒竜江（Heilong jiang・amar）

中ソ国境川，露語で「amar」河と呼称される。「amar」の語源は，満州語の普通名詞の「amar」で「河」から転じて固有名詞となったものである。漢語では同音で「阿穆爾」と表記している。

黒竜江流域に居住する giljak（gilyak・自称 nivx・樺太で Nirv）族は「Bamur」で「大河」と言う。鄂溫克（ewenke・自称 evenki）族の第一集団（部族）である索倫（solon）族は「amar」で「河口」と言い，蒙古（menggu・mongolia）族は，「khara-muren」で「黒河」としている。

古い契丹語でも蒙古族と同音の「哈喇没里」としている。「哈喇」は「黒色」で，「没里」は「江」である。従って，契丹語でも「黒江」といったのである。漢語に於ける口扁の多くは外来語を示している。

中国では古くから「黒水」或は「黒江」と呼び慣らわしていて，時には略して「黒（hei）」と呼称することもある。色彩に対する感覚は民族性と関係があるが，黒は方向で言うと「北方」を表現し，玄武（くろい）とも用いられ，祝事に黒衣をまとう地方もあって，全て黒点子（heidian）式ではなかったものと思われる。

古い記録では「浴水（yushui・山海経）」とあったり，「完水（wanshui・北史）」や「望建河（wangiian he・旧唐書）」，「室建河（shijian he・新唐書）」，「烏桓水（uhuan shui・太平寰宇記）」などと書かれている。「浴」と「烏」には「黒色の」という意味があったといわれている。「望建」は「莽監」のことと言われ，満州語の「青」である。この「青色」は「黒色」とほぼ同様に用いられたといわれる。「完水」と「室建」は各れも黒竜江の上流の名称であったと言われている。

中国に於ける「黒水」の河川名称は南北朝時代の文献に散見を始め，「黒竜江」の名称は遼史から見える。

黒竜江の流水が黒色なのは上流の海拉爾河（hailar he）や得爾布爾河（derbur he）などの分流と，これを集めた額爾古納河（Argun he）が，泥炭地（peat Region）の水を流下させるからである。沼沢地の樹林や植物の腐朽体が黒泥層となって堆積し溶解して河水を変色させているのである。（第１図黒土の分布）

黒色の河水が降下し，蛇行している様は恰も竜が跳飛し乍ら東流する姿態に似ていると命名の由来が説明されている。満州語では古くから黒竜江のことを「薩哈連烏拉」と言っている。「薩哈連」とは「黒」の別称であり「烏拉」とは同語の「江」である。（「盛京通志」。）黒竜江の「竜」は確かに「竜の如き」姿であろうが，この発想は蒙古族・漢族の各れものか定かではない。「神功経德碑」にある「烏竜江」などの用い方から見て，「烏拉ula）」が「烏竜（ulong）」に換音

されたのではないかという疑いもある。

なお，わが国では樺太の原名として「サガレン」を用い，後に「サハリン」と呼称するのは，この満州語の「薩哈連」の「黒」から来ている。

黒竜江の別称は，これらの他に「石里罕（shilihan)」河や「石里（shili)」河（金史）などがあるが，これは黒竜江全域というよりは上流部のことで，現在のソ連領の「石靰喀（shileke)」河を指しているものと思われる。「石勒喀」とは鄂倫春（orochon）族の言葉で「黒い」という意味である。又，蒙古族の小部族の部族名ともなっている。「石勒喀河」は漠河からソ連領となり，黒竜江の北源流となっている。

一方，黒竜江の南源流の河川を「額爾古納（ergun・argun)」河と言っている。蒙古語で「広い河」即ち河幅の広い河の意味がある。

北源流の石靰喀河と南源の額爾古納河の合流する地点は漠河（mo he）の西，恩和哈達（enfuhada）で落合う。これから下流が黒竜江本流ということになる。黒竜江本流はその河口まで，全長2,850kmある。漠河以下の本流では舟の航行が可能である。（第５図黒竜江水系図）

額爾古納河の更に上流は少し複雑になっている。蒙古人民共和国の北東の辺彊を流れ込んできた「克魯倫（herlen)」河が，「呼倫湖（hulum nur・helum nor)」へ注ぎ込まれ，一旦呼倫湖に吸収されてから，湖の東北から流出して額爾古納河となる。従がって，額爾古納河の上流は呼倫湖で，呼倫湖の上流は克魯倫河となる。

呼倫湖は「呼倫池」とも書くことがあって，蒙古語の「達賚諾爾（dilai nur)」を用いることもあって「達賚湖」と表記することもある。蒙古自治区の昭烏達盟にも同名の湖があって，「達里諾爾」「達里泊」「達爾泊」と書いている。蒙古語で言う dalai nur とは，「海のように大きな湖」という意味があり，各々「海湖」と呼称されたこともある。

扨て，呼倫湖の東北から流出した水が額爾古納河へ注ぎ込んでいると述べたが，この状態になるのは増水期のみで，平時は呼倫湖と額爾古納河は繋がっていない季節川である。増水期になると呼倫湖の東北にある流出口の穆得那亜河を通って額爾古納河へ通ずることになる。その意味から，呼倫湖が額爾古納河の上流と言えるのは，正しくは増水期のみのことである。

呼倫湖へ注ぎ込む河は克魯倫河の他に南から黒泥層を伴って流入する「烏爾遜河（Orxongol)」がある。（呼倫湖には俗に七つの河が流入していると言われている。）烏爾遜河も上流に湖をもっていて，「貝爾湖（貝爾達賴湖ともいう・buir nur・boir nor)」，更に貝爾湖の上流に在る河を「哈拉哈（kharkrg・chalchyn gol)」河という。各れも泥炭黒泥地である。貝爾湖と哈拉哈河のほぼ中程に，かつての戦場であった nomenghan が在る。黒竜江の最上流の一つである。

呼倫湖と貝爾湖を併せた一帯を Hulun Buir 高原と呼称している。古くは巴爾嗄（baikhal）高原とも称したことがある。わが国では，かつてホロンバイルと発音したことがある。海抜高度平均700～1,000ｍある草原地帯である。

この高原一帯は満州地方で最も古い民族の一つと思われている「粛慎」の地である。漢代には遼東郡西安平の地とされ，晋代には挹婁（いろう）国を設けられている。隋に入って突厥の地に没し，唐は突厥を駆逐して黒水都督府を置いている。この黒水は哈拉哈河を指したものである。併し，やがて靺鞨が活躍はじめて自ら室韋（しっい）国を造っている。遼は上京（じょうけい）路とし，元は和林路に区分し，金代は北京（ほっけい）路を設けている。成吉斯汗は，

この地に諸族を集め兵を挙げたと伝えられている。

明代には索倫族，達呼爾族などの小部族の拠点となり，清は呼倫貝爾副都統による直轄統一を試みている。雍正年間には北端の海拉爾に土城を築かせている。光緒34年（1908）には初め呼倫庁を置き，のちに呼倫府に昇格させて黒竜江省に編入をしている。1914年呼倫県として黒竜江省竜江道に属されている。その後，内蒙古自治区の呼倫貝爾盟に区画されている。

両湖の在る高原は東北地方では最も気候条件の厳しい処で，年平均気温が－2.2℃（漠河で－5.0℃）であり，降水量年平均では，海拉爾で339.8mm（第３図及び第４図参照）である。年間降霜日数も100日を超える。海拉爾では193日，漠河で159日の記録もある。従って，耕作地としては不適で，専ら草原牧場として利用され，古くから騎馬族の舞台となっていたのである。

呼倫湖は古名を倶倫泊と称したとも伝えられる。明代には別に「闊灤海子（かつらんかいし）」とも言ったといわれている。金幼孜や北征録などの記録には「闊灤海子に山あり，水を限って堤防をなし，遙かに高山に見ゆる。斡難（あつなん）と臚朐（ろじゅん）など七つの河水が流入する」と述べられている。清に入ってからは専ら「庫楞湖（ふるんこ）」が用いられ（清一統志）今日の発音に近づいている。

貝爾湖は呼倫湖の西南195kmの地にある。明史には「捕魚児海（ぶいるかい）は，洪式20年藍玉が元の順帝の孫である脱古思帖木耳（とぐすちむうる）を逃がしたが，その次子である保奴を捕えた地」としている。一時は「捕魚児海」と意味ありそうな名称で呼ばれたこともある。

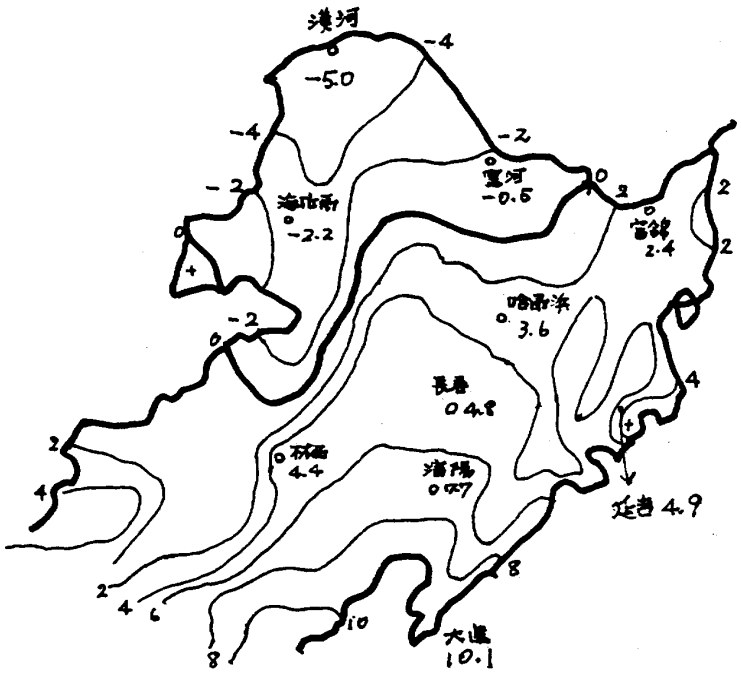
旧唐書には黒竜江の水源は克魯倫河であるとしている。「倶倫泊から河出でる（呼倫湖・庫楞湖のこと），黒竜江の水源は鄂倫河，倶倫泊の上流は克覩倫河を通る。」（旧名を臚朐河という），倶倫河は鄂倫河に近いが，流れは離れている。併し，倶倫泊へ集る。倶倫泊の東北から出る流水は「吉爾巴斉（chirubache）」河となって黒竜江へ注いでいる。故に鄂倫河が正源である」と言っている。「克魯倫河（heirlen he）」とは「克覩倫河」とも書いているが，時には「鄂倫河」も用いたのである。克魯倫河は呼倫湖の西方の水源で，上流で呼倫湖と結びついているので，黒竜江の水源は貝爾湖の他に克魯倫河もあるといっているのである。鄂倫とは oron で，元史にある斡難（onan）の音の転化であろうが，克魯倫河を指したものである。

第１図　黒土の分布

（叙述の都合で第２図は割愛）

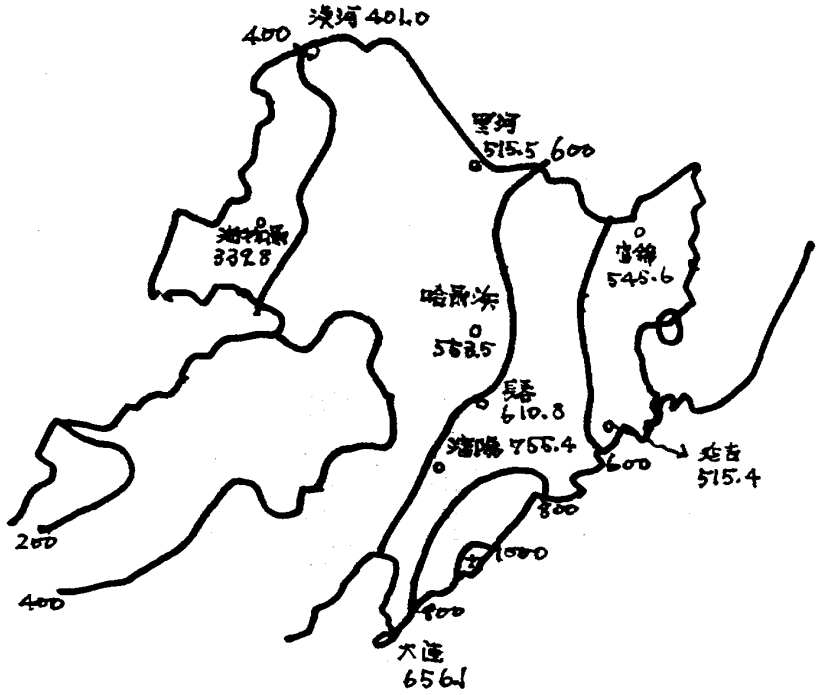
第３図

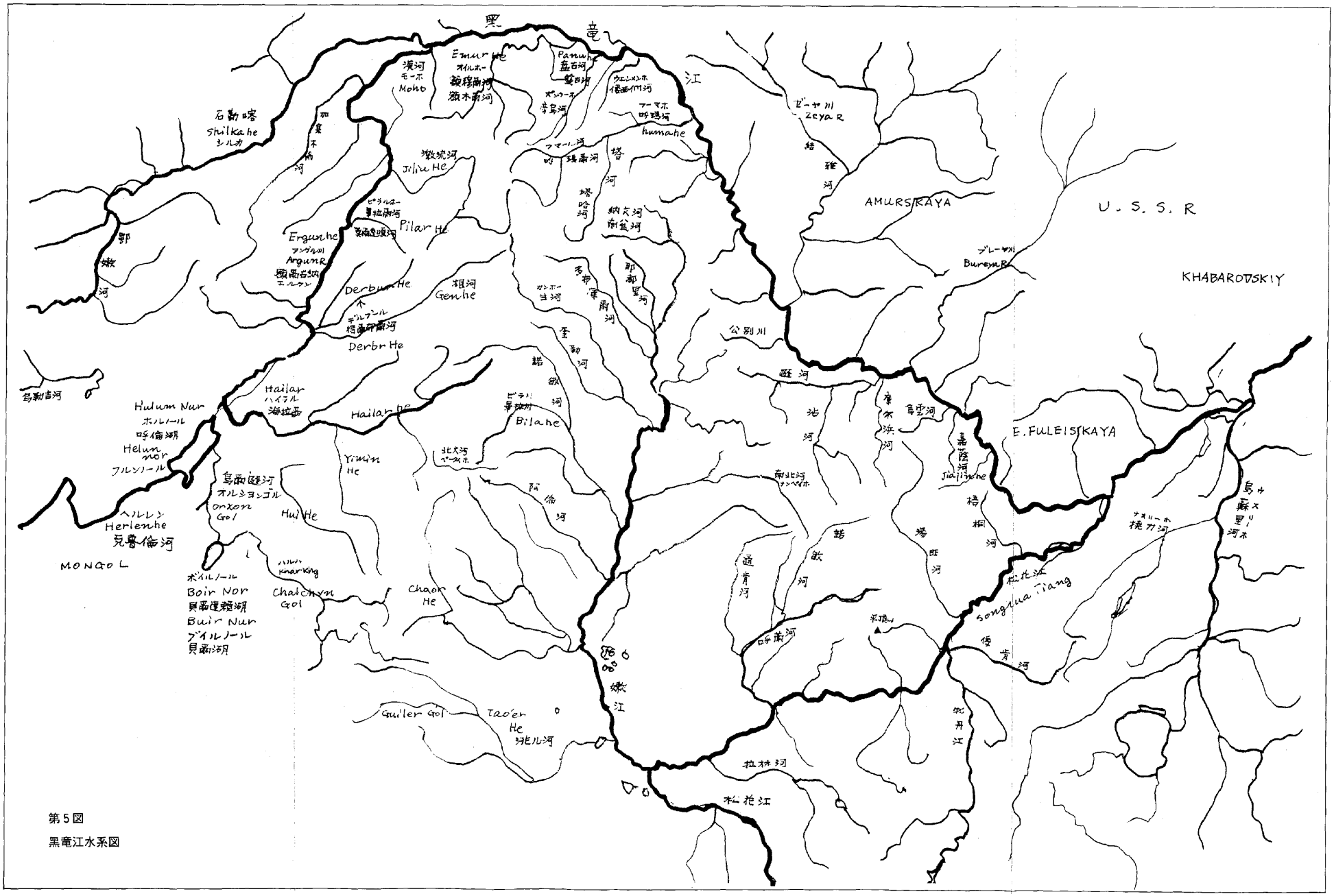
年平均気温



第４図

年降水量




黒竜江
Moho
Shilkahe
Emur He
Pamuhe
Humahe
Zeya R
AMURSKAYA
U. S. S. R
Jiliu He
Pilar He
Erguna he
Argun R
Derbur He
Derbr He
Genhe
Hailar
Hailar he
Bilahe
Bureya R
KHABAROVSKIY
E. FULEISKAYA
Hulun Nur
Helun nor
Yimin He
Hui He
Orxon Gol
Herlenhe
MONGOL
Boir Nor
Buir Nur
Chaohyn Gol
Chaor He
Guiler Gol
Tao'er He
Jiajinhe
Songhua Jiang
松花江

第5図
黒竜江水系図

呼倫湖からみると西源の克魯倫河と東側の海拉爾（hailar）河の両河川水量によって維持されているとみてよいであろう。湖の長さ約80km，幅35km，面積2315km²，湖海海抜545.5m，最大深度8m，半鹹水湖である。魚がよく獲れ，周辺は良好なる草原で牧場になることが，古来より諸族の争奪の地と化したのである。黒竜江の起源をなす黒色の水の発生地帯でもある。

乾季に於ける額爾古納河の確実なる上流は海拉爾河である。常水河である。額爾古納河と合流する処は新巴爾虎左旗（xinbaragzuoqi）付近で，その先を流れると呼倫湖，南へ下ると「烏爾遜河（orxongol）」となる。この低地は河川の落合点で文明の十字路でもある。増水して来ると海拉爾河の河口は逆流して呼倫湖へ注ぎ込まれる。海拉爾河は全長622kmある。支流には「莫爾格靰河」と「伊敏河」がある。各れも湿地帯の細流を集めて合流している。海拉爾は蒙古語で「墨」を意味していると言われている。

遼代には海拉爾河のことを「凱里（kaili）」と記録されており，元史では「海喇児（hailar）」や「海剌爾河（hailar he）」と表現されたり，元朝秘史には「合泐里（hailar）」とあって発音は今日と変っていない。併し，その後別な表記が用いられ少しずつ変化している。盛京通志には「開拉（kaila）」と書かれ，黒竜江外紀では「海蘭児（hailaner）」と言い，清代には別名であるがと断わって「合羅爾河（heluoer he）」とも呼称している。1940年海拉爾市が置かれてから「海拉爾」が定着はじめている。

額爾右納河へ流れ込むのは海拉爾河だけではなく，海拉爾河の下流になるが「根河」や「得耳布爾河」などもある。このように合流点には1河川でなく同時に3河が集まっているので，三河地方と呼称されている。海拉爾河の下流も含めて三河地方が成立し，そこで産する馬や牛を「三河馬」「三河牛」と呼称している。良質の生産地としても知られている。

この他に額爾右納河の支流には「莫爾達嗄河」や「激流河」「加集木爾河」などがあって，「漠河（mohe・moho）」に至っている。

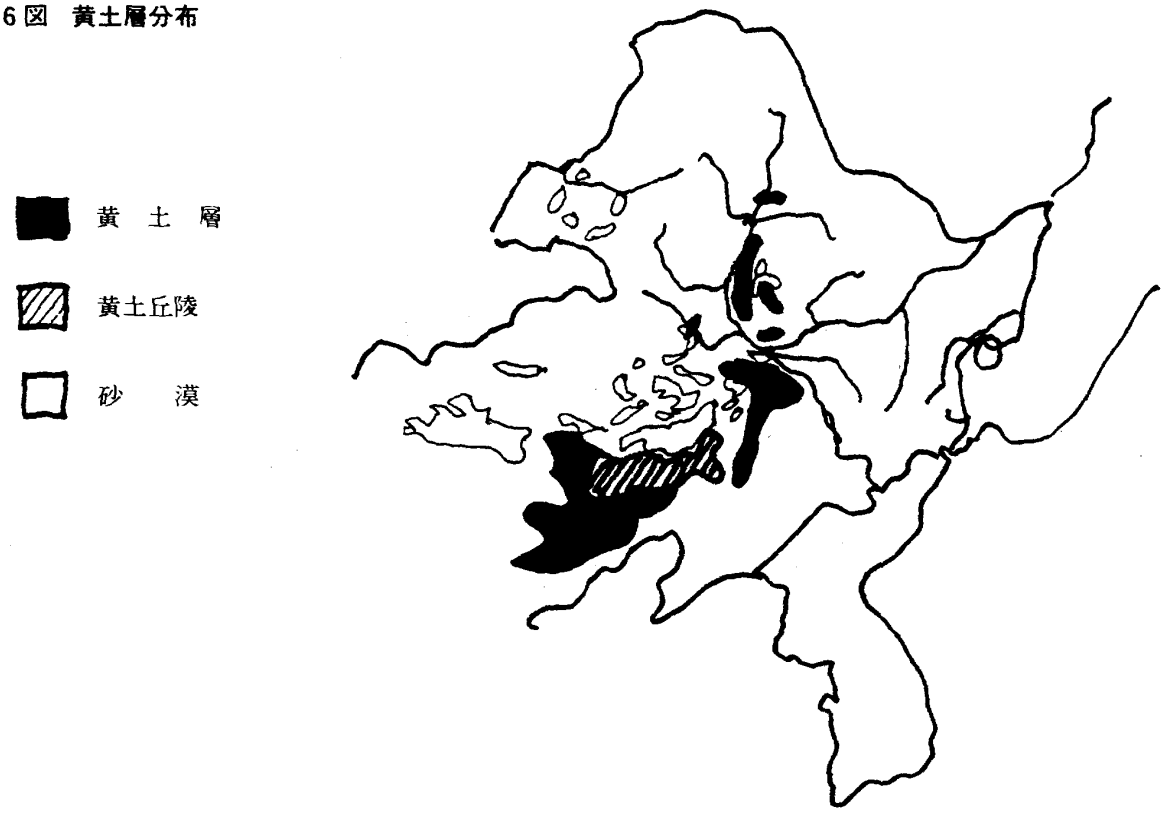
漠河は中国東北部の最北端に位置している。黒竜江が北へ大きく迂回している地方である。これは大興安嶺の古い溶岩地形が北へ突出していることに據るのである。地形からみると大興安嶺に囲まれた内陸が泥炭層や黄土層を形成しているとみえる。（第6図及び第7図参照）

漠河は黒竜江の支流で，同県の西端にある雉雍察山系が水源である。明代には「木河」と称していた。これは木河衛を設置したことにあると言われている。清代に入いると，いくつかの異称があり，「黒河」「穆河」「磨河」といっている。（黒竜江志稿）「墨河」は河水墨の如しから名付けられ，「磨河」は雨季急流となり曲流する様は「曲折如旋磨」と言うが如く両岸を磨きあげることから来ているという。やがて同音の漠河を用いるようになったと言う。（呼瑪志）初めは各々別な河川であるかの如き印象を与えるが，同一河川で漠河の集落の東北で黒竜江と合流している。洪水期に氾濫し周辺を没した事が幾度となくあるが，最近では1958年溢水となった。今日では再造され河道も旧に復している。黒竜江の支流としては決して大きな方ではないが，ここから下流が黒竜江であるということと，付近に金鉱が有ることで知られている。

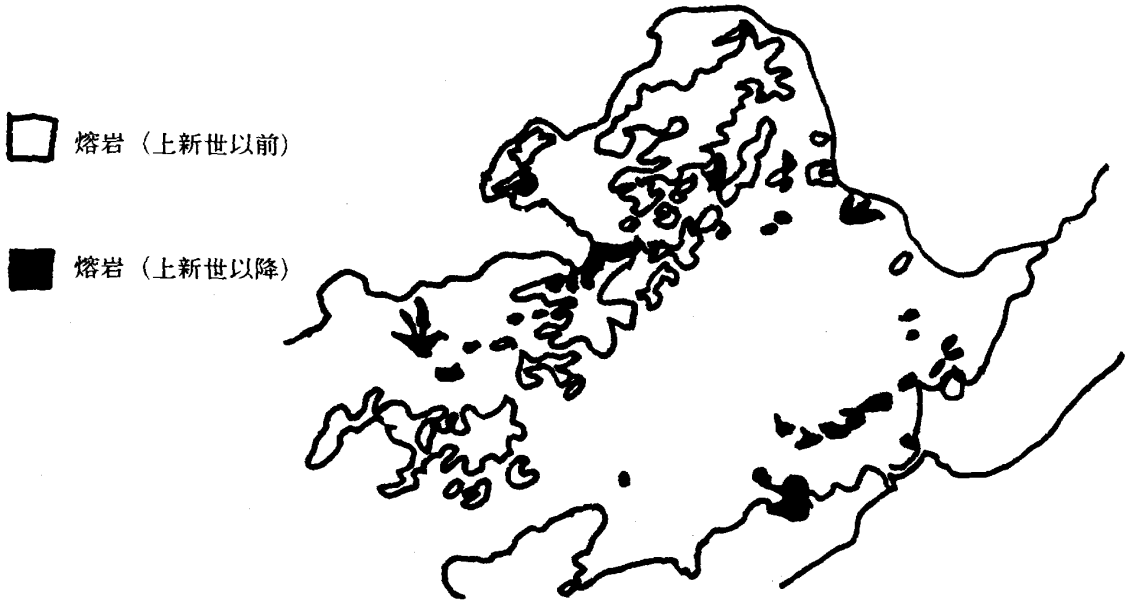
漠河から下流の黒竜江の主な支流には次のような河川がある。

「額穆爾河（emur he）」，「旁烏河（panu he）」「衣西肯河（iciken he）「倭西們河（wecimen he）」「呼瑪河（huma he）」「公別拉河（gongbiela he）」「遜河（sun he）」「庫爾浜河（kurbin he）」「烏雲河（xun he）」「嘉蔭河（jiayin he）」などがある。別格として松花江及び第二松花江，嫩江，

第6図　黄土層分布



第7図　溶岩地形



牡丹江，烏蘇里江などがある。これらの内特に知られていると思われる支流を取上げてみてみる事にする。松花江以下は項目を別にして扱うことにする。

2

黒竜江の支流河川の名称について

黒竜江（漠河より下流）は今日，その殆んどが中ソ国境線になっている。本来であればソ連領支流についての検討も必要なのであるが，黒竜江省が中心であることから中国領の河川名称を扱うものとする。従って黒竜江省中の黒竜江右岸（西岸）の支流が中心である。又，右岸支流の内，特に経済的社会的に重要と思われる額穆爾河及び旁烏河，呼瑪河，遜河，嘉蔭河などについて触れてみることにする。既に述べた如く松花江などの大支流は古くから独立した一河川の如く扱われて来たので，別枠として検討するものとする。

①額穆爾河（emur he）

黒竜江の支流，漠河の少し下流に在る。河の語源は満州語の「河」である amar の転音でないかといわれ，露語でいう黒竜江の名称の発生地ではないかと考えられる。別な説に蒙古語の「平安」の意味だと言われ，この説の方が有力視されている。

表記には「阿穆爾」「阿穆爾河」「額木爾河」「阿靰兄昔哈」「阿靰巴赤色」などと書いた各種地図が在るが，各れも同音か同音の派生とみることができる。

唐代には「訥河」と言われ，それ以前は「室韋水」といわれたと伝えられている。この河の下流は数十の細流状の無定河となり泥炭の湿原地帯を構成している。

②旁烏河（panu he）

清通志や盛京通志に在る「平庫（pingke）」であり，竜沙紀略に在る「旁庫（panku）」で，水道提綱に在る「傍庫（banku）」と考えられている。別に「平果（pingguo）」とも言ったといわれる。更に「盘古（pangu）」や「盤古（pangu）」もあり，後には「瀋家河（panjia he）とも言うが各れも音訛とみる。原意と語源は不詳である。

③呼瑪河（huma he）

黒竜江右岸（西岸）で大きな支流の一つである。愛輝（aihui）の上流に在る。愛輝は瑷琿（aigun）とも，黒河（hei he）とも言われ国境の街として知られている。

清代には黒竜江副都統を置いている。光緒34年（1908）瑷琿直隷庁を設け1913年愛輝県と改名している。黒河地区に属している。宣統元年（1909）呼瑪河支流の興江溝や興竜溝から次々と金が発見されて、金山鋏（chinshanchien）の如き Gold rush の集落が形成される。解放後はやや暫く鴎浦（oupu）と模河の地区を併せて，黒竜江右岸の中心的な機能を果していた地として広く知られている。

呼瑪河の表記にはいろいろあって，「庫瑪爾河（kumaer he）」としたり，「庫瑪爾（kumaer）」，「瑚瑪爾河（humaer he）」，「呼瑪爾（humaer）」と書かれているなど多様である。

「呼瑪（huma）」とは蒙古語で，「騎馬の前列の人」の意味がある。河川名称と如何にして結び付いたかは不詳である。呼瑪河の源流は二つ在って，南源を「呼爾勘河」といい，北源を「靰克河」といい，別名を「塔河」或は「塔哈河」と言っている。呼瑪河の東南方向に「呼瑪金山」があって，ここを流下する河を「呼吉爾河」，他の河を「呼爾哈河」と言う。各れも呼瑪河の分流である。こうした諸河川が中流から下流にかけて広がり沖積地がある。

かつて鄂倫族の拠点の一つでもあったことでも知られている。

④法別拉河（febiela he）

支流の中でも小河川であるが，付近に金鉱がある河として知られている。呼瑪河に近く愛輝の北部，黒竜江右岸の河である。この河の上流には中国有数の金鉱がある。鉱区は法別拉河の分流である「猪肚河」や「駱駝溝」「中興溝」「西虎拉溝」「千里溝」といった細流の渓口に坑口を有している。

⑤　遜鉱（sun he）

古くは「粛慎の地(sushen da shui)」と呼称していたと言われる。やがて，「双順河(shuangshun he)」となり，「孫河（sun he)」と音変化したものと推測されている。（竜沙紀略及び水道提綱）

地元の人は「遜河」と言わず「泡子河（paozi he)」と呼んでいるが，これは東北地方特有の方言で「小さい湖」のことであるから，語源とは直接関係がないものとみられている。「遜河」の他に「遜別拉河（sunbeila he)」という記録もあるし，別に「庫穆爾河（kumurer he)」という河川名称があったとされる。「庫穆爾」とは満州語で「隘口」を意味している。隘口（aikou）は狭い山の入口のことであるが，遜河の場合湖の如く出水口が狭く，貯水面積が大きい河川のことを指したものであろうと思われる。

遜河の東源には「卧牛河」があり，同じ上流の北源には「洼霑河」や「烏底河」などの支流がある。遜河の北側には遜河の集落があって遜河稽墾局が設置されていた。1929年に設治局を設けて，1931年遜河県に昇格している。1924年奇克地区と烏雲地区を併せて遜克(xunke)県となっている。今日では黒河地区に所属している。

⑥嘉蔭河（jiayin he）

もともとの名称は「佳金河（jiajin he)」であったと伝えられている。「佳（jia)」は美しく良いであるから，良質の金或は金鉱のある河であったのものが，同音の「嘉蔭」に変化したものである。嘉蔭からは原意を見付けることが困難になって了ったと言われる河川である。その他に「札伊河（zhayi he)」や「札音河（zhayin he)」などの名称も用いられるが音訛したものである。

集落の嘉蔭県は伊春市の北で，烏雲県の宝興鋏の南50kmの地にある。東は中ソ国境である。1927年に蘿北県を分割して仏山（fushan）設治局が設置されて，1929年に仏山県とするが，1955年に嘉蔭県と河川名をとって改称されている。

なお，伊春市（yichun）は小興安嶺の南側斜面に在り，松花江本流の支流にあたる湯旺河が貫流しているので，嘉蔭河や烏蔭河などとは流路方向が異なり南下している。分水嶺を中に挟んでいる。周辺は森林地帯で伊春市は木材集散の中心地の一つでもある。

3

松花江（songhua jiang・sungaari chiang）

中国では第一級の河川に「江（jiang)」を用いている。「三江」と言えば黒竜江，松花江，長江（長江と揚子江）のことである。「河（he)」は一般の河川の名称である。（特に黄河huang he を指すこともある。）

松花江は実際には黒竜江の支流であり乍ら「江」扱いとなっている。全長1840km，流域面積

54万5600㎢あり，単独の第一級河川としてもおかしくないものと思われている。黒竜江の支流には松花江の他に嫩江（nenjiang・nongchiang）や牡丹江（mudanjiang・mutanchiang），烏蘇里江（wusuli jiang）などの大河川がある。これらの河川は各々後述する。

なお，嫩江は「どんこう」と呼び慣らわしている。烏蘇里は「河」と呼称する場合もある。

中国東北地方の水系をみると遼河系の集水地域を除いて，他は全て黒竜江水系の中に含入される。黒竜江は又，ソ連領にも集水域をもっているので，集水面積で90万㎢を超えている。その黒竜江右岸の集水地域の内，松花江が⅔の面積を占めている。一部烏裕爾や白城内の内陸水系と綏芬河系，図們江系は除くとしても，東北地方経済を支えている主要地域は全て松花江水系に包合されているといってよい程である。（第８図参照）

松花江の源流は朝鮮半島の北部，中国朝鮮国境の長白山（changbai shan・changpei shan）の北麓に在る。途中扶余（fuyu）付近で東に折れて流下し拉林可や呼蘭河などの支流と合流して黒竜江へ注いでいる。

松花江は長白山地の白頭山天池（baitou shan tianchi・paektu tienchi）より流下する。（第９図参照）白頭山天池は山頂の火口湖で9.2㎢，湖面海抜2,155ｍの溶岩台地を形成している。湖水北部から流出して吉林省（Jilin sheng）へ下り，同省を縦断して北上し，北の黒竜江省から南下する嫩江と合流し東へ折れる。嫩江と合流するまでの松花江を第二松花江（Dier songhua jiang）と言って区分している。従って，嫩江との合流点から東へ向けて黒竜江河口へ出る横断松花江を松花江本流と言っている。

松花江は，その上流に２大支流である第二松花江と嫩江をもっていることになる。併し，合流地点が湿地帯であったこともあって，松花江の上流が第二松花江なのか，嫩江なのか判断がつきかねるため古くから河川名称が混乱していたのである。

これは松遼分水（第10図参照）が，古い時代には遼河の上流域が分流地帯に流れ込んでいたことにも據るのである。現在の瀋陽の北までの河水が全て合流地へ流れ込んでいたし，松花江本流も逆流していた時代がある。中央（合流点）の湖水へ周辺の河水が集中していたのである。これでは上流と下流の判断がつきかねるのが当然でもある。

更に今日では合流点が上昇を開始し，遼河上流が地盤沈下していることから，松花江と遼河が結び付くことも有り得る状態である。松花江の上流が遼河となり，遼河の上流が松花江という地形状態を現出するかも知れぬ。

松花江は最も古く「弱水」と称している。（三国志・夫余伝）「夫余国の北に弱水あり」（後漢書）と記録されているのも，この松花江のことある。

ただ，弱水（ruoshui）とは本来特定の河川を指したものではなく，舟を浮かべる事のできぬ流量の少い河川の名称であったから，中国の各地に同名の河川がある。甘粛省の山丹河や陝西省の洛水の上流，青海省の弱水，蒙古自治区の弱水（居延河）などがそれである。勿論，東北地方で生活する諸族にとっての弱水は松花江ということになる。

後漢書にある「夫余国」とは，今日の吉林省の農安（nongan・旧竜湾）付近の地と考えられるので，第二松花江を指したものであろうと思われる。但し今日の扶余付近とすると松花江本流ということになる。この合流地帯は常習水害地で溢水が泥炭湿地帯を蔽っていたので，舟での航行が危険であったろうと思われる。

魏書に據ると東流する本流が「弱水」で，白頭山から北上する第二松花江は「速末水（sumoshui）であるとしている。又，魏書・勿吉国伝でも第二松花江は「速末水」で，本流の松花江は弱水であると言うのを見ると，後漢書の「夫余国」の北も本流の松花江を指したのかも知れない。

東流する本流の松花江はその後「那河（na he）」或は「他漏河（talou he）」と呼称されたとあるが（新唐書，東夷伝・流鬼）「他漏河」の音から言って，嫩江の支流で合流点に近い「洮儿河（tiaoer he）」であろうと思われる。

更に，新唐書・北狄伝・黒水靺鞨に據ると，北流する第二松花江は「粟末水（sumoshui）」と呼んだとある。松漠紀聞に據れば，粟末水と呼んだ第二松花江は「黒水（heishui）」と改めたとおり，その後，遼の太宗が「混同河（huntong he）」と命名したと述べられている。

第二松花江が何故「黒水」と称したかは不明であるが，弱水から那河（或は他漏水）といわれた東流の松花江と，速末水，粟末水，黒水，混同河と変化した第二松花江とは直接につながっていなく，松花江の上流が第二松花江とは考えられていなかったのである。

扨て，「混同河」と命名された理由は，嫩江や洮儿河や第二松花江が衝突する低湿地は諸河川の合流で滞水し，相互に混合状態となっていたので付けられたものである。併し，後に混同は別な意味にも付けられるので，この合流点を仮にA混同とする。（吉林省志引会典図説）（第11図参照）

併し，混同河が一般的河川名称となったか否かは不明であるが，ともかく第二松花江は混同河とする。その時の松花江本流の河川名は「鴨子河（yazi he）」であったと言われる。（遼史・地理志・東京道）河べりに野鴨が多く棲んでいたので呼称となったといわれる。ただ，中国で言う「鴨子」は鶩（あひる）のことであるので「鴨」そのものではない。ところが聖宗の太平4年（1024）松花江本流の「鴨子河」を詔勅をもって「混同江」としている。（遼史・聖宗紀）第二松花江は既に「混同河」であったから同一名称となり，松花江の上流が第二松花江であるといったと同じになったのである。（第12図参照）

北流する第二松花江の「混同」は，その合流点で多くの河川が混合する意味あいで付けられたA混同なのであるが，松花江本流の混同は違う場所の「混同」だったのである。

本流松花江の河水色は中流の黄土の影響があって黄色であるが，黒竜江と合流する地点では，黒竜江の深く黒い河水と交じり合わないで，黄色水は南側を流れ，黒水は北側を流れて，同じ一本の河川ではあるが，色彩によって中央から区分ができている。約350km程下流の伯利（chabarovsk, khabarovsk）まで至って初めて両色が交叉するといわれている。従って，松花江本流の混同は黒竜江と合流する付近へ名付けられたものである。仮にこれをB混同とする。（吉林省志引会典図説）（第13図参照）

これらの事からA混同とB混同は必ずしも本流，上流の関係から，松花江は一本であるという意識で名付けられたものではなかったのである。

たまたま松花江はA混同とB混同で統一されたものの地名としては定着できなかったようである。武聖総要では，「鴨子江」は大小泊の東で，黄竜府下（農安）の西方で，鷹や野鴨の居る処の河名であるとしている。位置からいうと第二松花江なのである。金史・地理志では，鴨子河というのは，松花江の本流と，それに続く嫩江のことであるといっている。松花江の本流

はB混同によって混同江となったので，合流点から北の嫩江の鴨子河は残ったとある。かつ，第二松花江は鴨子河の支流であるとしている。

金史・地理志・上京では，北流する第二松花江の河川名称は「宋瓦江（sungari jian）」であり，東流する本流の松花江は「混同江」（B混同）で，「来流水（lailiushui）」を入れて東へ向っているとある。「来流水」とは今日の拉林河のことである。かつ，混同江上流には二大支流があって，南に「宋瓦江」（第二松花江），北から下る「鴨子河」があるとしている。この鴨子河は嫩江のことである。

金史・宴伝に據ると「混同江」の本来の名称は「烏底江（ude jian）」であったものを改めたものといっている。烏底江は金史・地理志には，黒竜江の下流にある河川名称であるとしている。これらのことから，松花江本流は烏底江と呼称されていたものを混同江に改称されたと言うのである。（B混同）

同書には又，松花江の支流の主なものの名称も記してある。「活剌渾水（huolahunshui）」や（これは後の「呼蘭河」のことである。）「来流水」などがあげられている。元史・地理志にも同様に河川名称が記されている。「胡里改江（huligai jian）」これは後の「牡丹江」，更に「混同江」これはA混同の第二松花江のことである。

元一統志を見ると「混同江」の俗称は，古くから「宋瓦江」とか「松阿哩（sungari）」とか称していたとあるから第二松花江を指している。「宋瓦江」や「松阿哩」は漢語でいうと各れも「天河」を意味している。白頭山天池に発する第二松花江にふさわしい名称と考えられていたのである。

「松花江」の表現が用いられるのは明の宣德年間である。（明史・宣宗本紀，明実録，明一統志），ただ，明史・馮勝伝には「松花江」ではなく「松花河」とある。遼東志には，その他の支流の河川名称も載せてある。「灰扒江」とあるのは後の「輝発河」であるし，「脳溫江」とあるのは後の「牡丹江」のことである。「阿連河」は後の「烏蘇里江」のことである。ここでは「混同江」は「松花江」となっているだけである。

清代に入ってからの松花江は「松阿哩烏拉（sungariula）」を専ら用いるようになる。原音に近い表記になっている。訳して「天河」としている。

松花江は三国から晋に至るまでが「弱水」といわれ，北魏には「速末水」となり，隋唐に入いると「粟末水」，金代には「宋瓦水」，元代からは「松阿哩」，清代に入いると「松阿哩烏拉」と名称を変えて来たことになる。吉林通志では，「粟末」「宋瓦」「速末」「松花」と表記が異なるものの読み方は常に sungari から出たものであるとしている。柳辺紀略では「混同江」は一名「粟末江」「速末江」「宋瓦江」「松花哩者」「松花哩烏喇」などと言うが，各れも「天」であり，「者」や「烏喇」は「河」のことであるとしている。満州族（manju）にとって，第二松花江上流の長白山脈は視野に入いる最大の山岳であり，白頭山から流下する川は天から発する最大の河であったのである。最大の山の最も高く天へ達する池から発する河，それが「天河」だったのである。従って「天河」という限り直接には第二松花江を指したのである。

満州族の生活圏からみると第二松花江の行く先は，合流点から更に東の出口松花江本流を経て黒竜江へつながったのである。当然一本の河であると考えたのである。

上流から下流を考えると当然一本の河ということになり嫩江も支流の一つになったのである。

上流で「松花江」であるから下流も「松花江」でならねばならないとしたのである。「松花江」の名称は第二松花江から発したものである。

松花江の「松花」と「宋瓦河」の「宋瓦」とは sungari で同音であって，女真語（女直・Jurchi）である。（もとは女真・Jurchin であったが，遼の皇帝の宋真という名があったので語尾の — n を落して女直とした。）「尚加」或は「上江」の音訛であろうと言われている。又，「松阿哩」は満州語の「松戛」で，女真語の「尚加」「上江」「粟」などの音変化とされている。これらは各れも「白色」という女真語から転じたものといわれる。満州族の「天河」は，女真語の「白色」から来ていることになる。

松花江は女真語で解釈すると「白色の江」ということになる。

松花江の上流地帯をみると直接女真語と関係ないと思われる地区にも「白」と関係する地名が多い。長白山も元は「白山」であろし，白頭山，白頭山天池，白城（旧称白城子），二道白河，白山，白石山などがある。なお，白頭山の白頭は sierra nevada の如く「雪山」を想像するむきもあるが，これは火山噴出物のうち白色の軽石が多かったことで命名されているので，氷雪のことではない。

併し，女真語で言う「白色の江」というのは，単なる白色軽石のことではなく，上流の雪水を含めて渓水清冽を指したものではないかと推測できる。白河などの河川名は清冽を強調しているからでもある。

中国でいう「白頭（baitou）」は白髪頭であり，白髪の老人のことである。従って原名は女真語であったが，満州語で新し意味が加わり（天河），やがて漢語特有の字が当篏められて，松花江の河川名称が今日に至っているものとみることができる。

松花江の源流は長白山（脈）の北側の白頭山天池火口湖の北の破れ口から発して，「二道白河（天池二道白河ともいう。erdaobai he）を降り，北へ向って流れ「両江口（liangjiangkou）」で，「娘娘庫河（niangniangku he）」と東から来る「富爾嶺河（fuerling he）と合流して「二道江（erdao jiang）」となる。

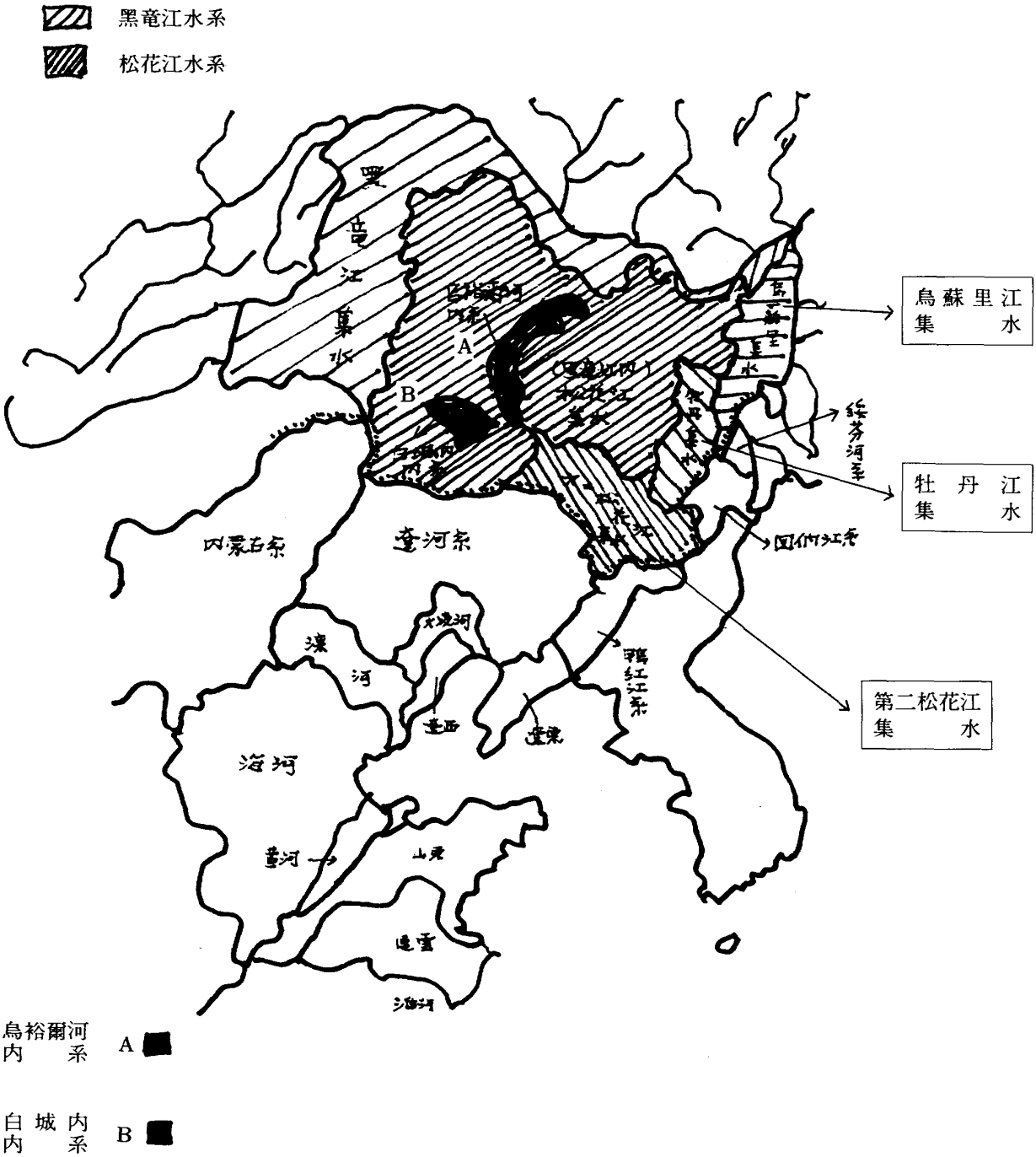
二道江から少し西へ流路を変え，更に北へ向って上る。（第14図参照）

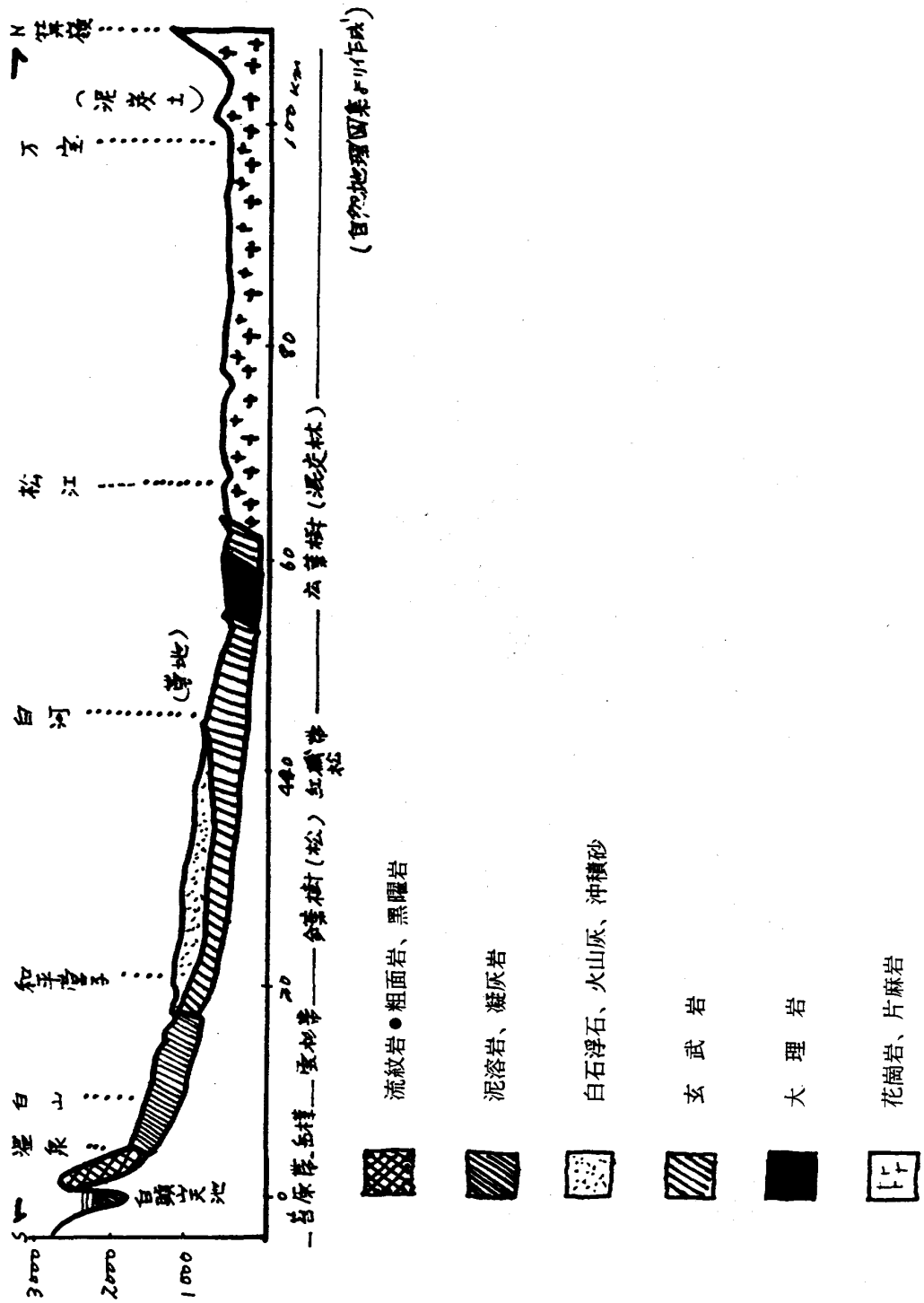
やがて，西から入って来る支流がある「頭道白河（頭道江・toudaobai he）」という。流路は更に北へ向い西南方向から流入する「額赫諾因河（echinuoyin he）」と「三音諾因河（sanyinnuoyin he」を合流させた（哈靰琿穆克河（harlejunmuke he）」を受入れることになる。北へ更に溯上すると西方から「雖哈河（suihar he）」と，「那爾琿河（naerjun he）」と「尼石哈河（nishihar he）」などの諸河川を次から次へと合流させる。50kmほど北上すると「大図拉庫河（daitulaku he）」や，「尼雅穆尼雅庫河（niyamuniyaku he）」や，「富爾哈河（fuerhar he）」などの支流を加えて，西北へ折れて樺甸県（huadian xian）の南へ入って「輝発河（huifa he）」が海竜（hai long）より数十の小河川を蒐めて西南から注ぎ込んで来る。

更に第二松花江は流路を東北に取り，南からの「大木欽河（daimuchin he）」や，「小木欽河（shaomuchin he）」や，「古洞河（gutong he）」などの諸河川を迎入れて流れる。北へ出て，北から入いる「大英溝水（daiyinggoushui）」と，東から来る「漂河（piao he）」と，西から来る「柳樹河（liushu he）」を加えて溯上する。

第8図

直接水源（集水）

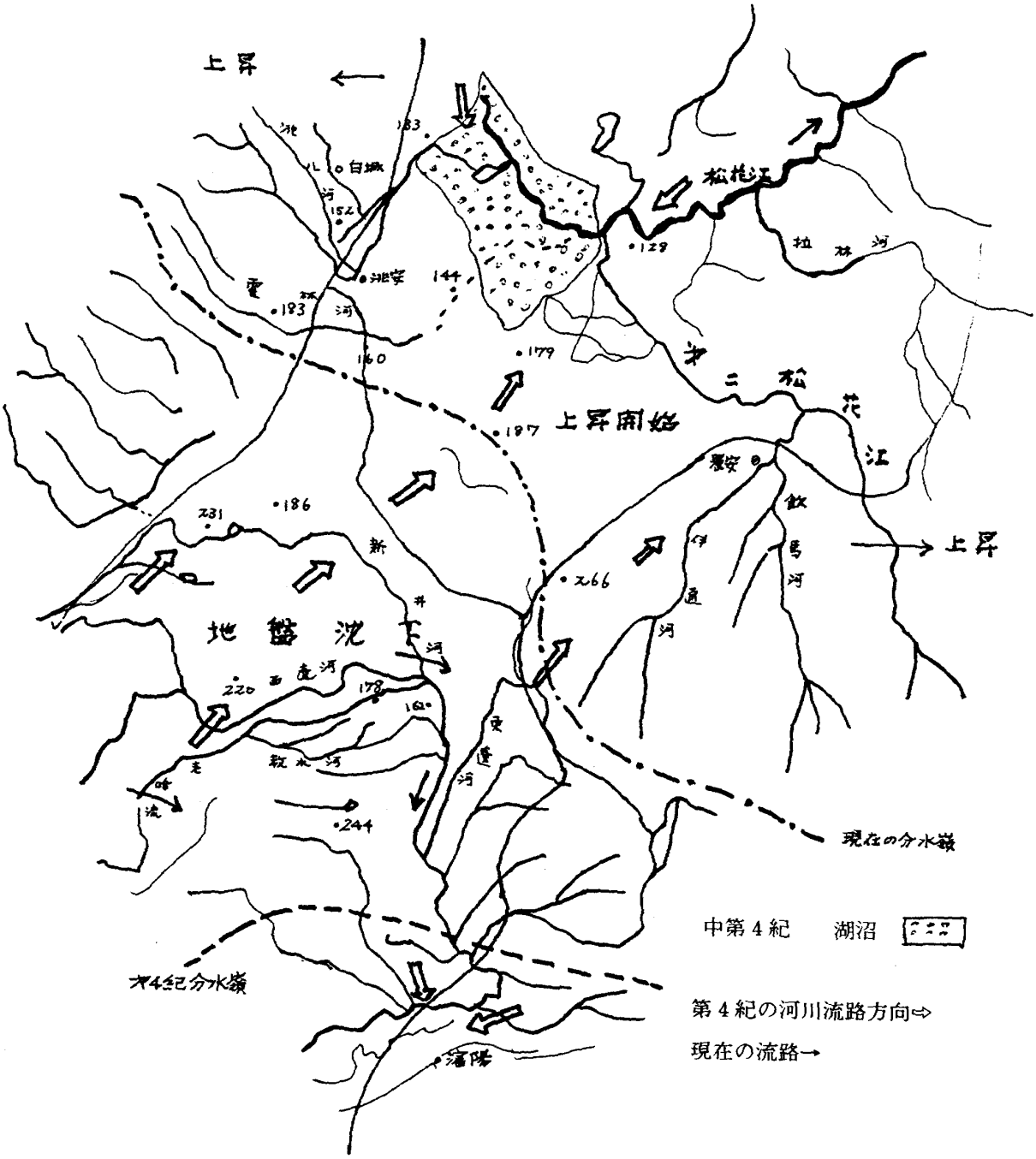




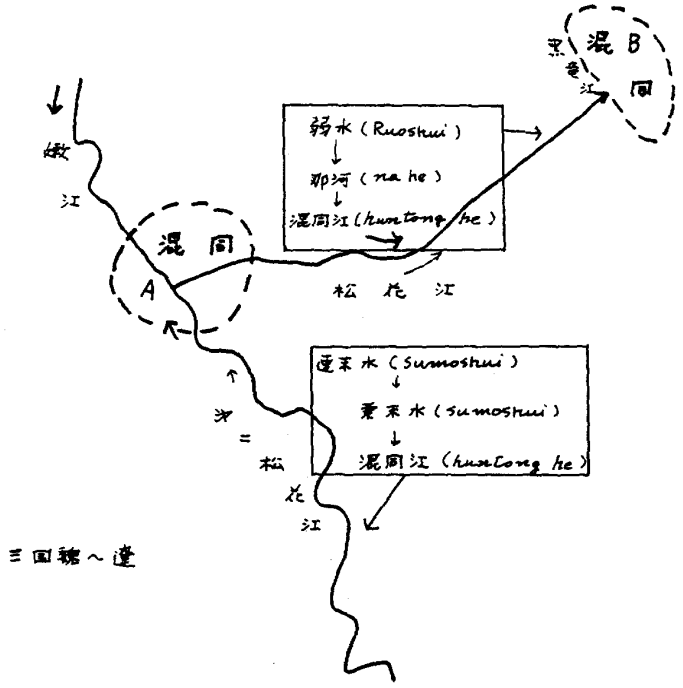
第9図

白頭山地から小白山脈

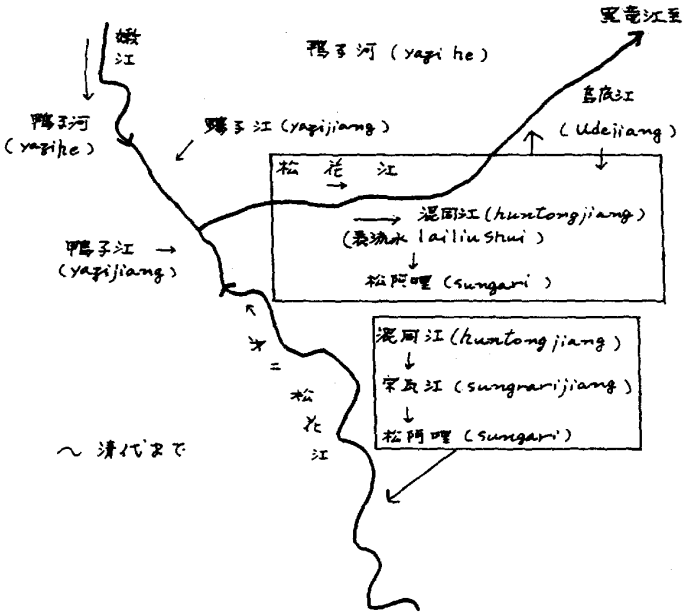
第10図　松遼分水嶺


上昇
白城
松花江
拉林河
上昇南始
二松花江
上昇
地盤沈
現在の分水嶺
中第4紀　湖沼
第4紀分水嶺
第4紀の河川流路方向⇨
現在の流路→
183
152
144
183
160
179
187
129
186
231
266
220
178
162
244

第11図　松花江名称変遷①



第12図　松花江名称変遷②



第13図
黄土の分布

やがて，一大支流の「拉発河（lafa he)」が流入して来る。流路は西北に変わる。南から「瑪延河（mayan he)」を入れ，北から「響水（xiang shui)」と「凉水（liang shui)」の二河を受け入れる。流路を再び北へ向けてから西北へ転じ，「大富太河（daifutai he)」と「小富太河（shaofutai he)」を加え，北から「雅門河（yamen he)」，西から「依蘭嗄哈河（yilangahar he)」，南から「海蘭河（hailan he)」を合流させる。

再び進路を東北へ転じて吉林の城南（chengnan）を経て東へ折れ西北へ流路を変える。烏拉城（ulacheng）の西を過ぎて，東南の方向から来る「錫蘭河（xilan he)」を加える。法特哈辺門（fateharbianmen）を出て陶頼昭（yaolaizhao）を越えると流路は更に西北へと変わり「大伊通河（dayitong he)」及び，「駅馬河（yima he)」や，「伊靱門河（yilemen he)」などの諸河川を集めて西北より合流させている。白頭山天池から発した水路はここで225kmに達している。

進路を西北へ取り乍ら農安県に入いる。北岸は扶余県である。更に続けて西北へ35kmほど流れて三江口（sanjiangkou）へ達することになる。

西北から流下して来た大河嫩江とここで合流する。古くは「諾尼江（nurnijiang)」や「鴨子江（河)」といわれた嫩江が混同江と衝突する地点でもある。又，混同江の河川名称の起源地点（A混同）でもある。第二松花江は，ここで終わり，松花江東流へ河水を移すのである。

三江合流点から新しい松花江は流路を東へ転じる。先ず「拉林河」を入れて吉林と黒竜江両省の省界を走ることになる。双城（shuangcheng）付近を経て哈爾浜（harbin）へ至る。（第15図参照）この間約250km，南方から「阿什等河（ashendeng he)」，北方から「呼蘭河（hulan he)」などを加える。賓県（bin xian）の西で「斐克図河（feiketu he)」が東から入り，方正（fangzheng）の西で数十の小河川を蒐めた「瑪延河（mayan he)」が西南から来て合流する。

依蘭（yilan）の妙噶珊の南を過ぎると支流中の大河「牡丹江（mudanjiang)」が南から来て合流する。

依蘭城の北を迂回すると「倭肯河（woken he)」が東南より流入し，東北へ流路を取ってから「巴蘭河（balan he)」が西北から合流して来る。富錦県城（fujinxiancheng）の北を巡って東北へ向い，図斯科の西を経て，その東で「黒河（hei he)」となる。西方は同江（tung chiang）の10km先に黒河卡倫があって，西北から来た大本流の黒竜江と合流することになる。ここから上流の西岸は黒竜江省であり，対岸北側はソ連領で，E, FULEISKAYA となり，ventseleva や kukelevskiy, vovkresenovka などの集落が立地している。この河口まで松花江は全長1840km余となっている。

以上の如く松花江は,その原流まではあまりに遠くL字型に折れまがるなどして複雑な流路を辿ることで，広義の松花江をとる場合は白頭山より黒河（黒竜江と合流する地点）までを呼称するのであるが，狭義の松花江は，白頭山より三江口（嫩江との合流点）までを指している。松花江の河川名称からすると当然第二松花江を指すので，今日でも松花江という場合狭義の方を呼称している。一方残った方の松花江（三江口から黒竜江と合流地点）までは「混同江」とする場合がある。(第16図参照)

4

松花江の支流河川の名称について

① 都魯河（doul he)

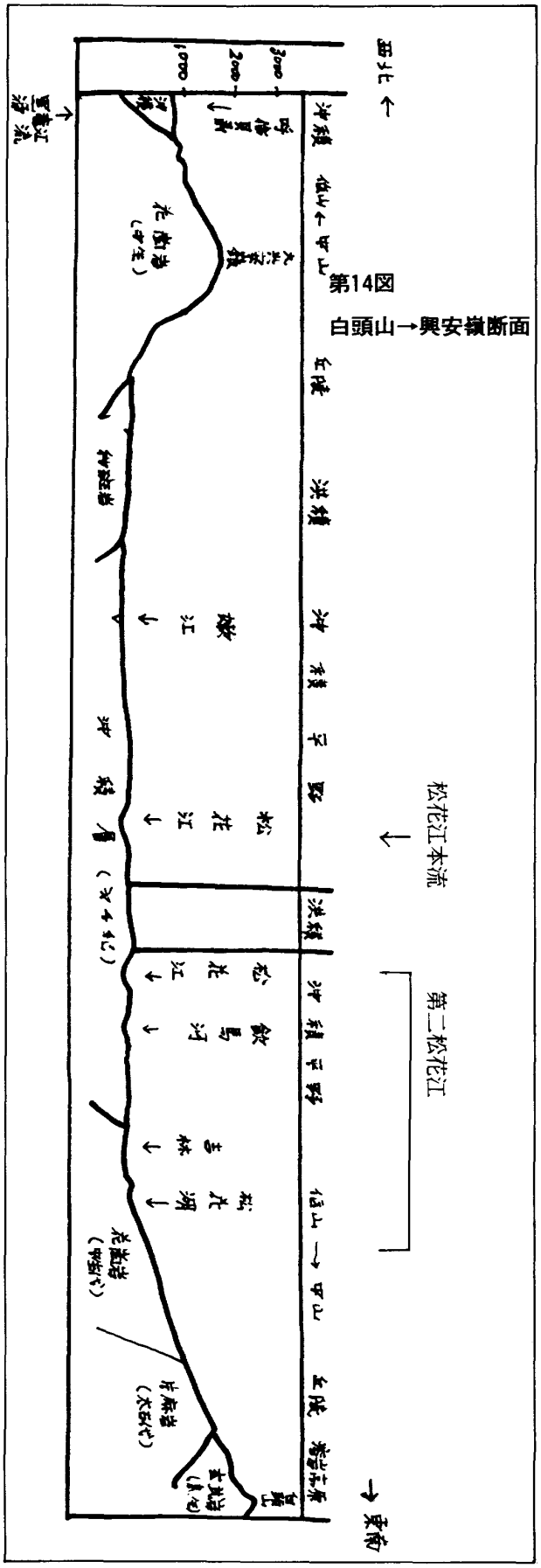
この地方に脱倫衛（tuolun wei）を設置したので，傍を流れる河を「脱倫河（tuolun he)」にしたと伝えられている。(明太宗実録)

清代に入ってから「図鞏河（tulu he)」と改名し，時には「杜兒河（duer he)」と呼称したと記録されている。(大清一統興図・康熙皇輿全賢図）又,「図魯河（tulu he)」とも書いたとある。(大清一統志）乾隆元年版の盛京通志には「禿魯河（tulu he)」とある。各れも同音であるが表記の差があるものと見做されている。語源は蒙古語の「棟梁」の意味から転じたものと言われている。この川の流域は金の採取地として知られ火焼営採金場（huoshaoying）などの集落があった。松花江の出口に近く黒竜江と平行し乍ら南下して，松花江に合流する。隣接して流れる「梧桐河（wutong he)」とも平行し中流で一回，下流で一回小溝が交叉している。その意味では梧桐河の支流的な河川である。(以下第17図参照)

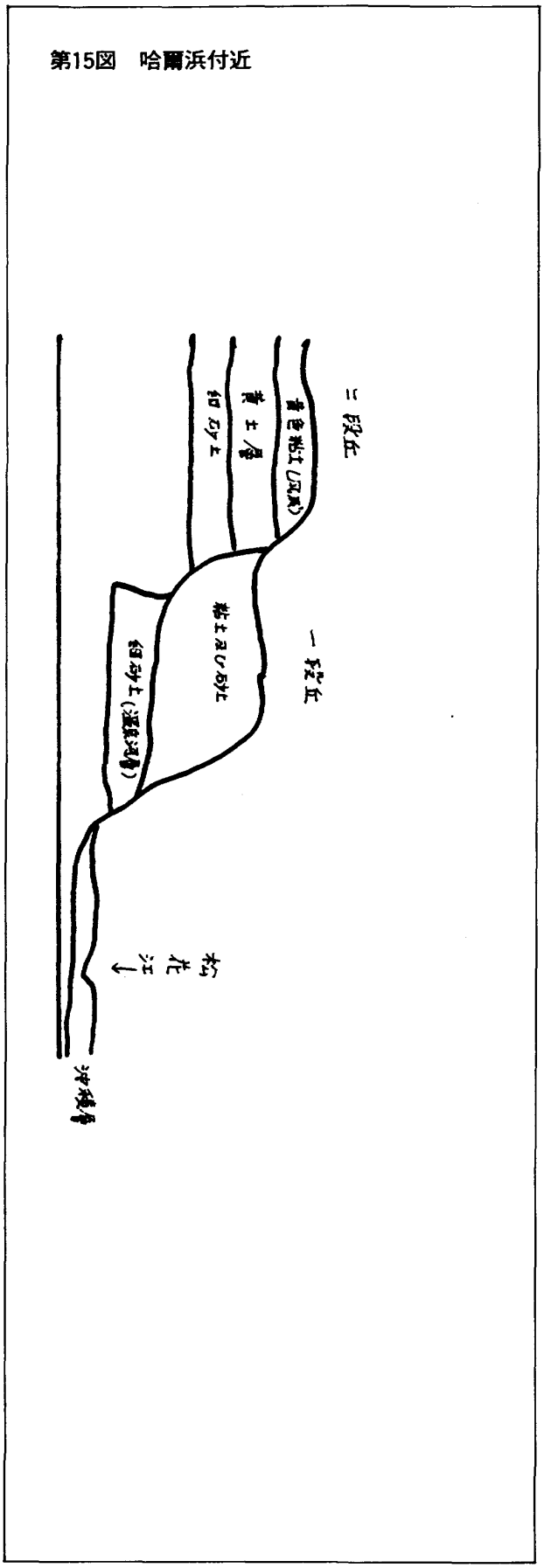
② 梧桐河（wutong he)

遼及び金代には「奥屯（autun)」とあり，その後「伍屯河（wutun he）と呼称された。(明実録)，明太宗実録には「五屯河（wutun he)」とあり，盛京吉林黒竜江等興図には,「武屯河（wutun he)」とされている。又，康熙皇輿全図には「烏呑河（utun he)」として載っている。黒竜江輿図説では「穆遜河（muxun he)」となっている。盛京通志では再び「烏呑河」を用いている。各れも同音変化とみられるが原義不詳である。この同音へ「梧桐（wutong)」を当てたのは，中国では青桐のことであり，吉祥のものとされているので用いたものと思われる。

上流では二俣になっているが鶴崗（hokang）付近で合流して湯原（tangyuan）の東北から松花江へ注いでいる。

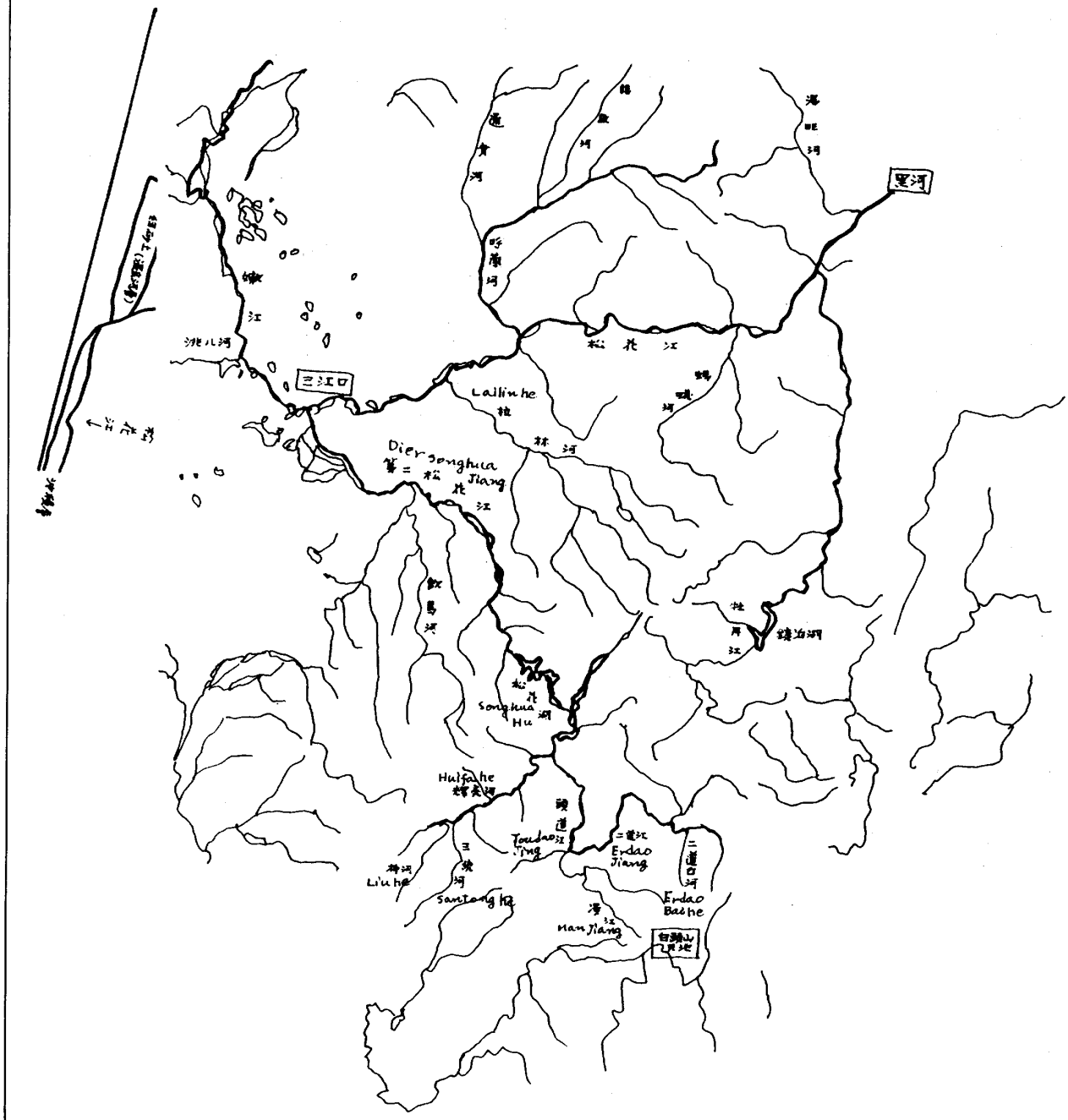


第14図
白頭山→興安嶺断面

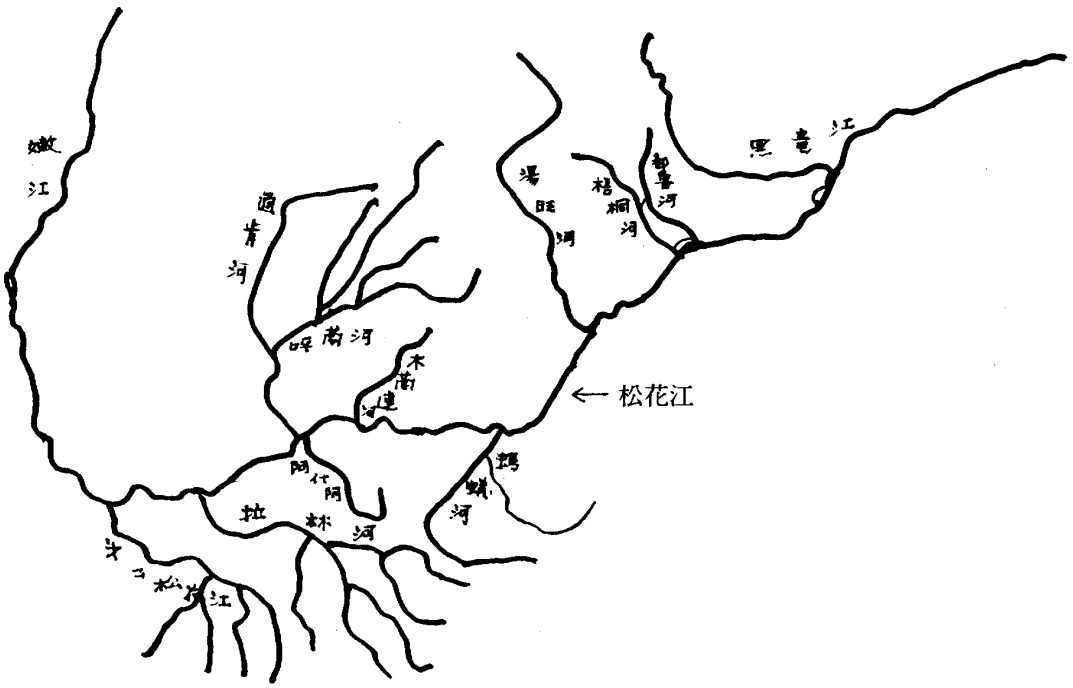


第15図　哈爾浜付近

第16図
松　花　江


黑河
三江口
Lalin he
拉林河
Dier songhua Jiang
第二松花江
松花江
Hulan he
Songhua Hu
Toudao Jiang
Erdao Jiang
Erdao Bai he
Liu he
Santong he
Man Jiang

第17図　松花江支流



③　湯旺河（Tangwang he）

この河川名は金史あたりから登場し，その巻一に「土溫水（tuwen shui）」とあり，巻十七には「屯河（tun he）」とあり，梧桐河と似ている。巻百二十一には「涛溫水（taowen shui）」とある。元史には二つの河川名が載っており「桃溫水（taowen shui）」或は「陳河（chen he）」と言うとある。明史も同じく二つの河川名があり，一つは「屯河」で，一つは「托溫河（tuo wen he）」となっている。明永楽三年に「屯河衛」を設けてから「屯河」が定着したといわれる。併し「呑河（tun he）」も用いられていたようである。清史には「屯河」と「呑河」が同時に使われ，吉林通志では「呑昂（tunang）」と「阿阿（aa）」が載っており，吉林外記には「呑河」とありまちまちである。これらの音はもとは同一で，満州語でいう「晨光」の意味があるとしている。晨光（cheng uang）とは早朝の光のことを指している。別に「溫旺河」の「湯旺」は女真語の「島」から転訳したものであるともいわれている。

湯旺河の上流は小興安嶺の東麓に在る「湍湖（tuan hu）」から発している。湍湖は「団海（tuan hai）」や，「端湖（tuan he）」ともつくつている。湍湖から出て「湍河（tuan he）」を下って「双子河（shuangzi he）」から折れている地点から湯旺河と呼称されている。途中伊春（ichun）市を経て，湯原の南で松花江の本流と合流している。

④　呼蘭河（hulan he）

斉斉哈爾（qiqihar）の東南350kmに在る河，金史に據ると「活剌渾（huaci hun）」とあり，この地に呼蘭鎮を設置したとある。金史・世宗紀には「胡剌溫（huciwen）」と呼ぶとされ

ている。元史・土土哈傳では「哈剌溫（haciwen）」となっている。明一統志には「忽剌溫（huciwen）」となっており，清通考や水道提綱には「呼輪（hulun）」を用いている。大清一統志では「呼倫（hulun）」となっている。これは清に入って呼蘭副都城を設置したことと関係があり，この城の別名を「霍倫（huo lun）」としたとあり，黒竜江外紀には「霍倫」となっている。

満州源流考には「胡剌溫」や「和倫（hulun）」，「呼倫」，「活剌溫」，「忽剌溫」，「哈靰渾」など各称の表記が用いられるが，呼蘭城が置かれてから「呼蘭河」となったとしている。「胡剌溫」や「活剌溫」はもともと女真語で「灶」のことであるとしている。「灶（zao）」は竈（かまど）のことである。「活剌」や「忽剌」，「呼倫」などの表現の中には満州語の「烟筒」のことを指したものであると言われている。

呼蘭河は小興安嶺に発している。上流で三俣に分かれていて，北源は小鞨額木山山麓から流下し，南源は小呼蘭河と呼称されて大青山から発している。両流は鉄力の東で合流して，途中に「納安邦河（naanbang he）」や，「欧根河（ougen he）」，「双銀河（shuangyin he）」などの河川を集めて蘭西の東から哈爾浜（harbin）市の北で呼蘭県の西にでて，北からの「通肯河（tongken he）が合流して来て，その南で松花江へ入っている。全長523kmある。

⑤ 木蘭達河（mulanda he）

木蘭達河は巴彦県（bayan xian）の東60kmに在る。清が坪蘭（pinglan）庁を設け，後に巴彦州となっている。光緒31年（1905）分割して黒竜江省呼蘭府としたが，西に木蘭達河があったでを県とし独立させている。この河は別に「木蘭答河（mulanda he）」ともいっている。木蘭とは蒙古語の「江（jiang）」を意味し，「達」や「答」は満州語の「源」であるとされている。蒙古語と満州語の合成語である。

金史・腊醅傳には「暮棱水（muling shui）」と載せてある。明史・兵衛志では「木蘭河」となってるが，清一統志には「穆倫河（mulun he）」としてあり，水道提綱には「木林河（mulin he）」とあり，黒竜江外紀には「木楞河（mulin he）」となっている。源流は木蘭県の北の小興安嶺の南で俗に「白木蘭」の流れとなって松花江へ入っている。

⑥ 螞蜒河（mayan he）

螞蜒河の「螞蜒」は満州語で「肘」のことであるといい，上流から西へ向って流れていた河が，急に東へ折れるといった屈曲した河を指したものだといわれている。

この字を当てたのは漢語で言う「蜿蜒（wan yan）」を連想させるものがある。蜿蜒とは曲がりくねって続く様をいっている。

尚志（shangzhi）県に入って西から東へ流れを変える「肘」の部分になる。尚志は1922年に五常，同賓の両県から分離して，葦河県と烏珠河設治局が置かれ，解放後尚志県となったものである。螞蜒河は途中「納大亮子河」や「西柳河」，「東柳河」，「金沙河」「黄泥河」「石頭河」などの分流を受入れて北上している。

⑦ 拉林河（lalin he）

源流は吉林省の額穆（蛟河）の北で，五常（wuchang）の東南拉林山の琵琶頂子である。北源は「霍倫河（huo lum he）」となっている。霍倫河は金史では「活倫河」或は「胡倫河」として扱われている。漢語の「威」の意味があるとされている。南源の方は「舒蘭河（shelan

he)」と称している。満州語の「果樹」である。

拉林河の俗称は「蘭稜河（lanling he)」である。「拉林」は満州語で，漢意でいうと「爽快」である。遼史・蕭胡篤伝には「喇离河（cili he)」とある。金史には「落黎（laling)」や「烈邻（lielin)」，「涞流河（lailiu he)」などとあって，上流は「蘭林河」であるとしている。元史では「剌隣河（cilin he)」，「喇离」，「落黎」「涞流」とあるが，全て音訛である。

上流の北源の「霍倫河」と南源の「舒蘭河」が合流し西北へ35km程流れて，「哈薩里河」と合流して，更に西北へ進路を取り向陽山の南，五常県の南を出て後沙山の西を流れる。ここへ「莫勒恩河」と「大泥河」が注入して来る。黒竜江省の南と吉林省の境界を流れることになる。楡林県の北を経て，双城の牛頭の北を過ぎ，黒竜江省の万隆の付近，柞樹岡の北で松花江へ入っている。全長448kmといわれている。

拉林河と松花江の合流点は古くから激戦地で古戦場としても知られている。

⑧ 阿什河（ashen he)

魏晋南北朝から唐まで「安車骨（anchegu)」と呼称されてたと言われるが，契丹国志巻十では「阿朮火（ashuhuo)」とされているし，三朝北盟会編の巻十八では「阿触胡（achu hu)と「阿禄陽（aluyang)」が載っている。大金国志巻一では「阿芝洲（azhizhou)」とあり，金史・地理志では「按出虎（anchuhu)」とある。金史・巻四・巻二十四・巻八十四などでは「阿朮滸（ashuxu)」とある。金史国語解をみると「按春（anchun)」とあり，金史人名更には「阿里出(alichu)」或は「阿里出虎(alichuhu)」とある。金史・地理志には「金源(jinyuan)」とあり，明一統志八十九巻には「金水河（jinshui he)」とある。水道提綱巻二十五には「按出虎」とある。清代は「阿勒楚喀河（alechuke he)」と言っている。これらの内金代の金源や金水河は「金」との関わりによって誕生した地名であるが，他は同音転化で女真語の「耳」であるといわれている。別に「阿能胡」「富儿虎」などというのも全て「耳」から来ている。この耳は，耳の様な形状をして阿什河は屈曲しているという蛇行が発想といわれている。

清代の「阿勒楚喀」とは俗称を「嗄拉哈」と称す民間の頑具で，耳の形に似ているものがあるが，この名称である。従って，意訳といえそうである。阿什河という名称は，この阿勒楚喀の略語であるといわれている。拉林河へ入っている。

⑨ 牤牛河（wangniu he)

金代には「末邻河（molin he)」とか，「摩琳河（molin he)」と言われていたと伝えられる。清代に入ってからは「莫勒恩河（moleen he)」といわれている。満州語の「馬」のことが，漢語で「牤牛」となったものである。

五常県の東南に在る摩琳山が源流である。西北へ出て太平山を過ぎて，北からの大泥河と合致し西へ流れて拉林河へ合流している。五常では第二の規模をもつ河として知られている。

5

嫩江（Nen jiang・Nong chinag)

松花江の最大の支流である。全長1,370km，流域面積24万3,900km²，支流には「南瓮河」「甘河」「諾敏河」「綽爾河」「洮儿河」など西側（大興安嶺側）が多く，東側（小興安嶺側）には「納謨爾河」「科路河」など数河川があるのみである。松花江と合流する下流は湖沼及び湿地帯となっていて「松嫩平野」と呼称されている。(第18図参照)

嫩江は古く「難水（nanshui)」と称していたといわれている。北史魏書・烏洛侯伝にも，大小の河川を蒐め東流（今の松花江本流のこと）して海に入いる難水と号すとある。この難水は松花江をも呼称したもので，松花江の上流と思われていたのである。

新唐書・東夷伝・流鬼では，「那河」或は「他漏河」も東流して黒水に至るとあるのを見ても松花江本流とつながっているという意識があったのである。ただ，「他漏河」は今日の洮儿河であるから，洮儿河と嫩江と松花江（東流・本流）の総称であったとみるべきである。「那河（na he)」は「難河（nan he)」の音訛とみられている。その後，「烏納水（wuna shui)」と言われたと，遼史・道宗紀にある。遼史・聖宗紀には「納水（na shui)」となっている。「鴨子河（yazi he)」或は「鴨子江（yazi jiang)」は，遼史・地理志や金史・地理志に記されている名称である。松花江の本流が混同江と命名されてから後も，第二松花江と合流する付近から北の嫩江には「鴨子河」が河川名称として残っていたのである。

元代に入って表記が少し変化して，元史・地理志には「脖苦江」或は「孛苦江（boku jiang)」となっている。元秘史をみると「納浯江（nayu jiang)」となっている。又，蒙兀儿史記・哈丹伝には「惱木連水（naomulian shui)」とある。明一統志には「脳溫江（naowen jiang)」となっている。

竜沙紀略には「呼喇溫江（hulawen jiang)」と変化している。

清一統志になると「諾尼水（nuni shui)」或は「諾尼木倫（nunimulum)」となっている。蒙古語に語源があり諾尼木倫とは，水清く平明なる流れを指していると言われている。

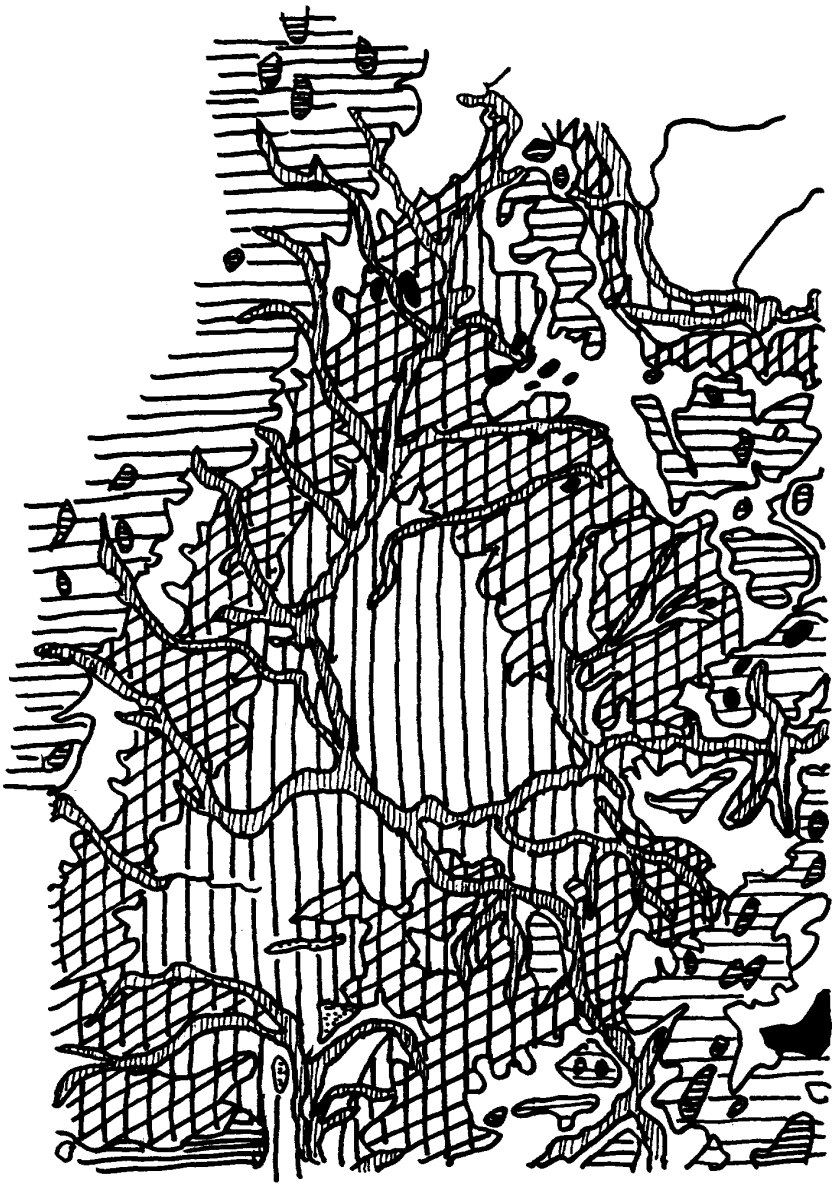
「嫩江」が表記されるのは，張穆蒙古游記からで，別名を「妹江（meijiang)」ともいったと言われる。嫩江の嫩は水の色のことで，女真語でいう「碧」或は「青」のことである。蒙古語や索倫語，鄂倫語，満州語の「碧」や「青」の音に近いとされている。

漢語で言う「嫩色（nense)」は，明るい青を強調するし，「嫩芽（nenya)」といえば，青葉，若葉のことである。嫩江の源流が，伊勒呼里阿林（yilehulialin）といわれ，この「阿林」は満州語の「山岳」「山地」であるから，深山幽谷で水青く碧色をしていることから名付けられたものと思われている。なお，「伊勒呼里」とは満州語でいう「松子山」つまり「松ぼっくり」の山のことである。海抜400～1,000mで，嫩江と黒竜江上流で支流である呼瑪河と分水嶺をなしている。一般には伊勒呼里高地と総称している。

嫩江には樹枝状の支流が幾つも有るが，これらの内よく知られたものと，地形的に特徴のある五大連火山池など含めて，その名称を検討してみることにする。

第18図

松嫩平野



沖　積（河谷）

沖　積（平野）

沖積と洪積

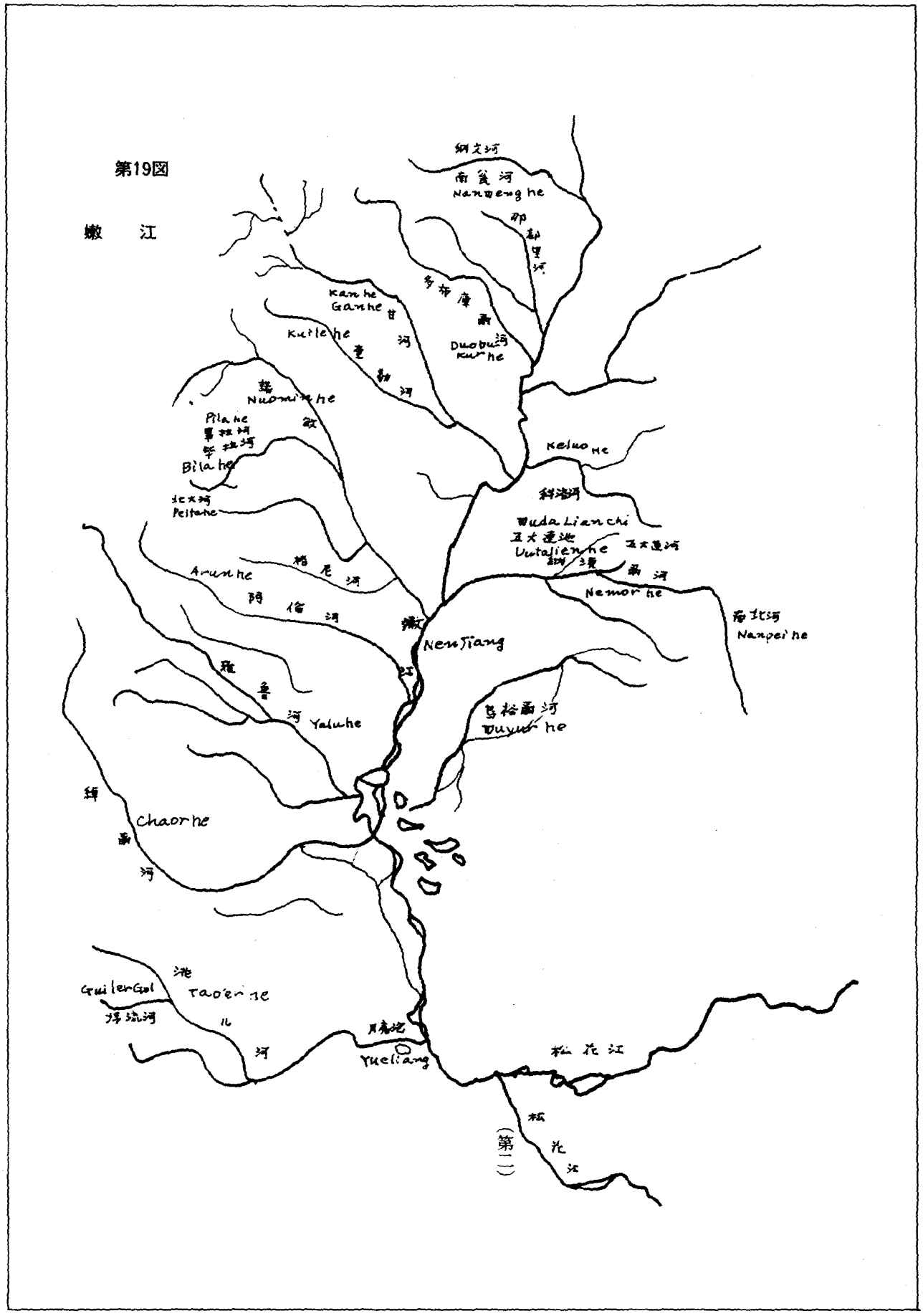
山 地 層（覆層）

山地残積

風　積

火山堆積

山麓被層


第19図
嫩　江
纲文河
南箐河
Nanweng he
Kan he
Ganhe
甘河
Kuile he
Duobu河
Kur he
Nuomin he
Pila he
Bila he
Kelu he
科洛河
Wuda Lianchi
Uutalien he
Arun he
阿倫河
Nemor he
Nanpei he
Nen Jiang
Yalu he
Duyur he
Chaor he
Gui'er Gol
Tao'er he
Yueliang
松花江
（第二）

6

嫩江の支流

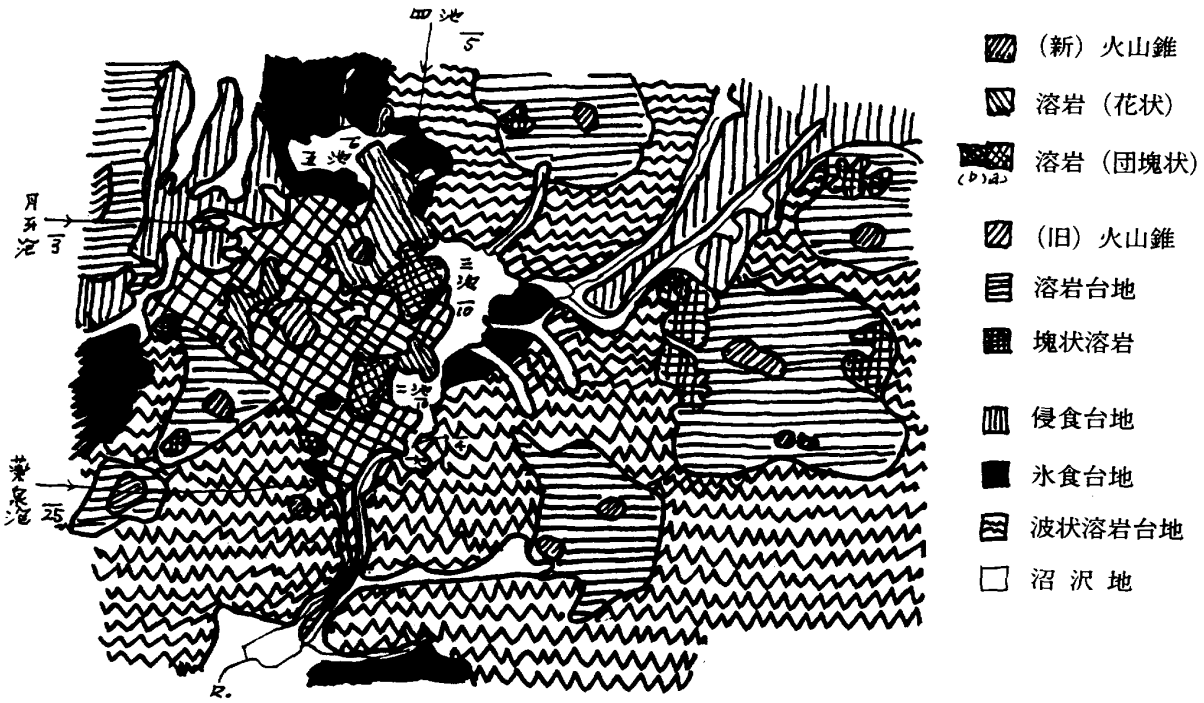
① 訥謨爾河（nemor he）

嫩江の東側中流にある河川で，黒竜江省の西部にあたる。小興安嶺（xiaohingganling）の南部に源流をもっている。最上流は「南北河（nanpei he）」で，ここから北上し途中で，「木構河（mugou he）」と「二更河（ergeng he）」を受けて西へ折れて「老好河」或は「額爾格」という分流や「二道河子（erdao hezi，倭農河ともいう）」，「引竜河（yinlong he，和羅爾河ともいう）」，「溫察爾河（wenchar he，東滙溫泉ともいう）」などと「五大連池」からの諸河川を集めて嫩江へ注ぎ込んでいる。

訥謨爾河は古く「納默爾（nemor）」と呼称されていたといわれる。（清会典），盛京通志では「納穆爾」と書いてある。その後の竜沙紀には「納木爾」となったりするが，各れも同音変化で，満州語で「明るい」ことを「納莫里」といったと水道提綱にあるが，蒙古語の「秋」のことである。全長が569kmある。

第20図

五大連地火山



② 五大連池（wudalianchi）

五大蓮池とも書く。納謨爾河の北側に在る。（第20図参照）

納謨爾河の一支流であった「白河（bai he）」が火山の爆発で塞がれた堰止湖である。五つの池が南北につながっていることから呼称されたものである。爆発噴火した山を五大連火山（烏雲和爾冬吉山ともいう）という。小興安嶺の南麓に断層があって，その上に十四の円錐火山が並んでいる。最高峰の山は南格拉球山である。玄武岩質の溶岩を流下させて堰止湖をつくると同時に隆起して石竜山と呼ばれる新山を形成している。竜が石になった形をしているといい，傍を流れる河を「石竜河」と呼んでいる。

堰止湖は南から北へつながり「頭池（一池）」「二池」「三池」「四池」「五池」といっている。清の康熙58～60年（1719～1721）に噴火している。特に1959年の6～7月の大爆発はよく知られている。

③ 烏裕爾河（wuyuer he）

金史には「蒲峪路の河」と称している。その後種々の表記がとられ「蒲与」，「蒲一」，「晋一」，「呼雨哩」（清一統志）

又，「呼裕爾河」と盛京通志にはある。その他には「胡雨爾」とか，「呼雨哩」，「呼裕爾」，「烏羽爾」などと書かれているが，全て「蒲峪（puyu）」の音訛と思われている。蒲峪は女真語でいうと「涝洼地（laowadi）」のことで，低湿地のことである。実際，烏裕爾河には下流がない。内陸水系である。乾燥地とは異なるので，伏流水となって地下に消え，下流地で徐々に溢出して沼沢化しているとみることができる。殊に雨季に入れば各地に新しい沼が出現することになる。こうした低湿地全域が嫩江と地下でつながっている河川で，従来の支流の概念からは少しはずれることになる。

④ 雅魯河（yalu he）

大興安嶺の東側が源流である。黒竜江省で嫩江と合流するが，下流は乱流し河跡湖や沼沢地となっている。上流は峡谷をなし両岸が断崖となっている処が多い。別に「雅爾河」，「雅勒河」「雅緑河」，「雅魯」とも書かれている。満州語の「畠の端」と蒙古語の「河辺」が同音であるため，二つの意味が入っていると言われる。かつ，農耕民族と遊牧民族が互に協力して開拓に従事したことが地名になったと言われている。

この河には数十の支流がある。主なものに「巴林河」，「臥牛河」，「大泉子満」（済心河ともいう），「溶烏力根河」（胡玉爾河ともいう），「罕達河」（上流を哈代河，下流を胡玉爾河とも呼称している），「泉眼河」（那木額河ともいう）などがある。各れも急流である。

⑤ 綽爾河（chaor he）

新唐書に「啜河」とある河とされている。「綽爾」は，その音変化であるとされている。大興安嶺の燎溝付近が源流で，泰安の近くの江橋へ出て乱流し，沼沢地をつくり，そこへ「扎賚特」や「旗音徳爾」などの諸河川を入れて合流し，嫩江へ流れ込んでいる。全長576kmある。泰安は古く黒竜江省に属していたが，1958年安広県と合併して，大安県となり吉林省へ編入されている。下流沼沢地には，いくつかの沼があるが，特に月亮泡は知られている。又，内陸漁業のさかんな地方ともなっている。

「綽爾」は，満州語の「称号」から転化したものといわれている。

牡丹江（Mudan jiang）と，その支流

志林通志に「敦化県の西南老嶺から源出。長白山の北三百余里を隔てた山」から流れ出して東北へ流路を取って「珊延」や「穆克河」などの諸河川を併せて沢地へ入いる。この沢地を畢爾騰湖」と呼んでいる。今の「鏡泊湖」である。この湖の湖頭水より流れて再び東北へ出て「湖爾哈河」となる。寧安に入って牡丹江となる。（第21図参照）

敦化（dunhua）は吉林省延辺朝鮮族自治州の北西で，明代には建州衛が設置されている。清代に入って敦化になり綏分府が置かれて地方文化の拠点にもなっている。1913年に寧安（ningan）となっている。県の南にある鏡泊湖は観光地の一つとなっている。

牡丹江の最も古い河川名称として知られるのは「忽汗水」続いて「呼爾孚河」と「呼爾哈河」である。渤海時代の呼称と言われている。「忽汗」と「呼爾哈」は同音である。渤海国の時に，この地方を「呼爾哈州」としたことに始まるといわれている。「呼爾哈」は「忽汗」の音訳である。「忽汗」は又，満州語の「大いなる網」の音訳から発したといわれている。

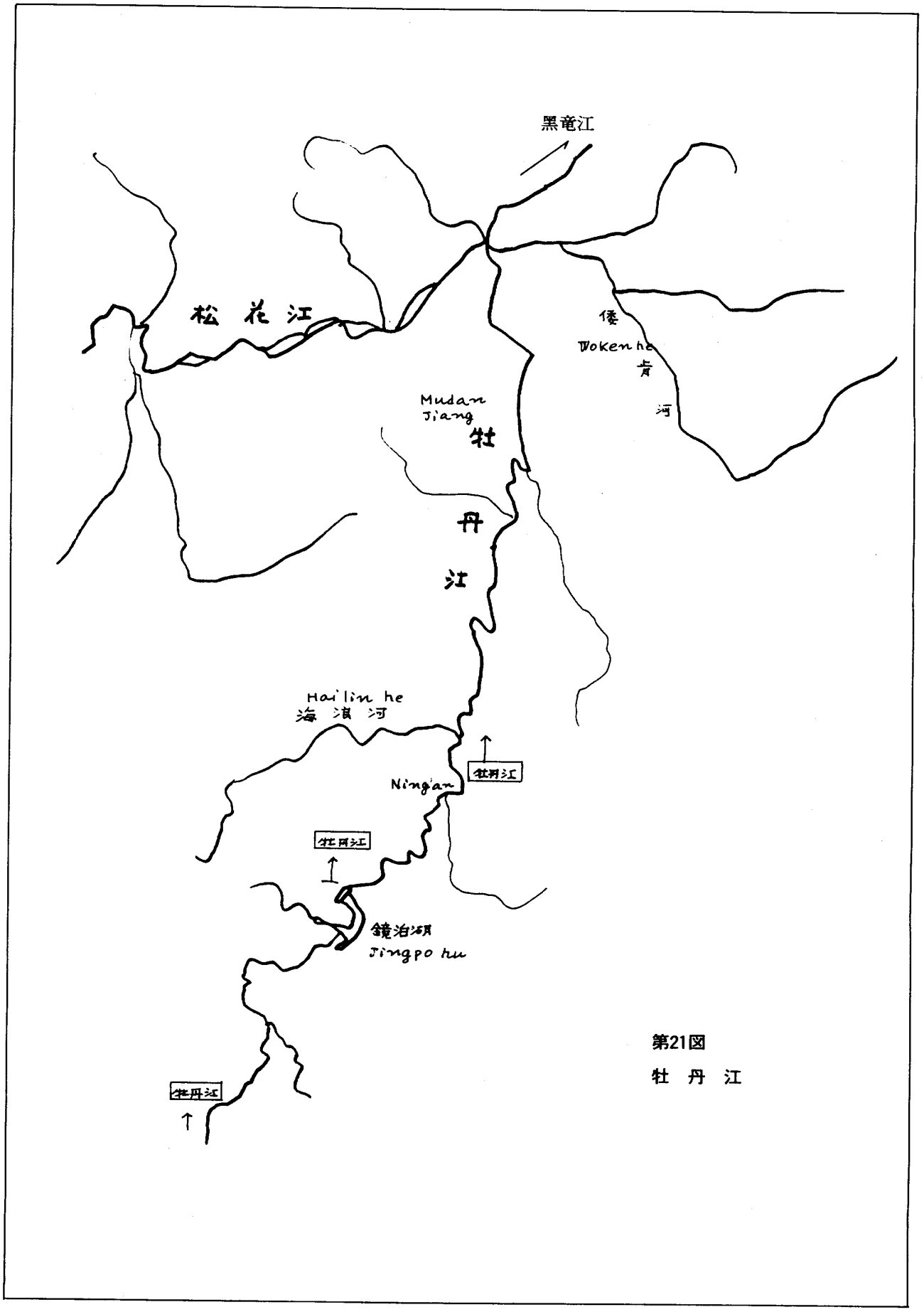
金代に入っても，この地名を踏襲して，「呼爾哈河」といっていた。同音から派生した「活羅海可」とか，「鶻里改」「胡里改江」なども用いられている。元代も同様に「呼爾哈江」」が用いられ，他に「忽爾海河」や「火儿哈河」も使われたりしている。清に入って，「虎爾哈河」が用いられ，「瑚爾哈河」と同じように使用される。やがて，「牡丹江」が登場する。「呼羅海」「呼爾哈」「虎爾哈」などは蒙古語では「羔羊（gaoyang）」の意味があるとされている。羔羊とは子羊のことである。満州語では「大きい綱」の他に「蛇行」の意訳ではないかという説がある。それは牡丹江の語源が「穆丹烏拉」にあるとすると屈曲する河の意味があるからである。

牡丹江と呼称される範囲についても諸説がある。つまり，河のどの部分が牡丹江なのかということである。一つは長白山の白頭山北麓の牡丹嶺に源流を発して，鏡泊湖に入いるが，この鏡易湖の北湖頭か出て牡丹江になるというのと，一つは鏡泊湖から下って寧安に入いるが，ここから牡丹江とすべきであるという説と，ともかく河川全域が牡丹江であるという説と入りまじっている。

ここでは源流から牡丹江として扱ってみる。北流した牡丹江は途中西から来る「海浪河（hai lin he）」を受けて，牡丹江市街へ入いる。ここで，「滙頭道江」や「二道江」「三道江」などの支流を併せ，依蘭（yilan）の手前で「烏斯渾河」や「倭肯河（woken he・八女投江で知られる）」を経て松花江の本流へ注いでいる。

依蘭鎮（古く三姓）には金代の遺跡である五国城や宋朝の徽宗と欽宗の幽閉の地として知られている。漢晋代は把楼の地でもある。北魏には忽吉の地で豆莫楼としている。隋では靺鞨の地でもある。唐は勃利州として黒水府を設置したが，後には，渤海国に没している。遼は烏舎，鉄驪，五国，伯哩の路として，金は呼爾哈路（同名の河川名から）と区分し，元は合蘭府の地とし，明代は女真圏に入っている。

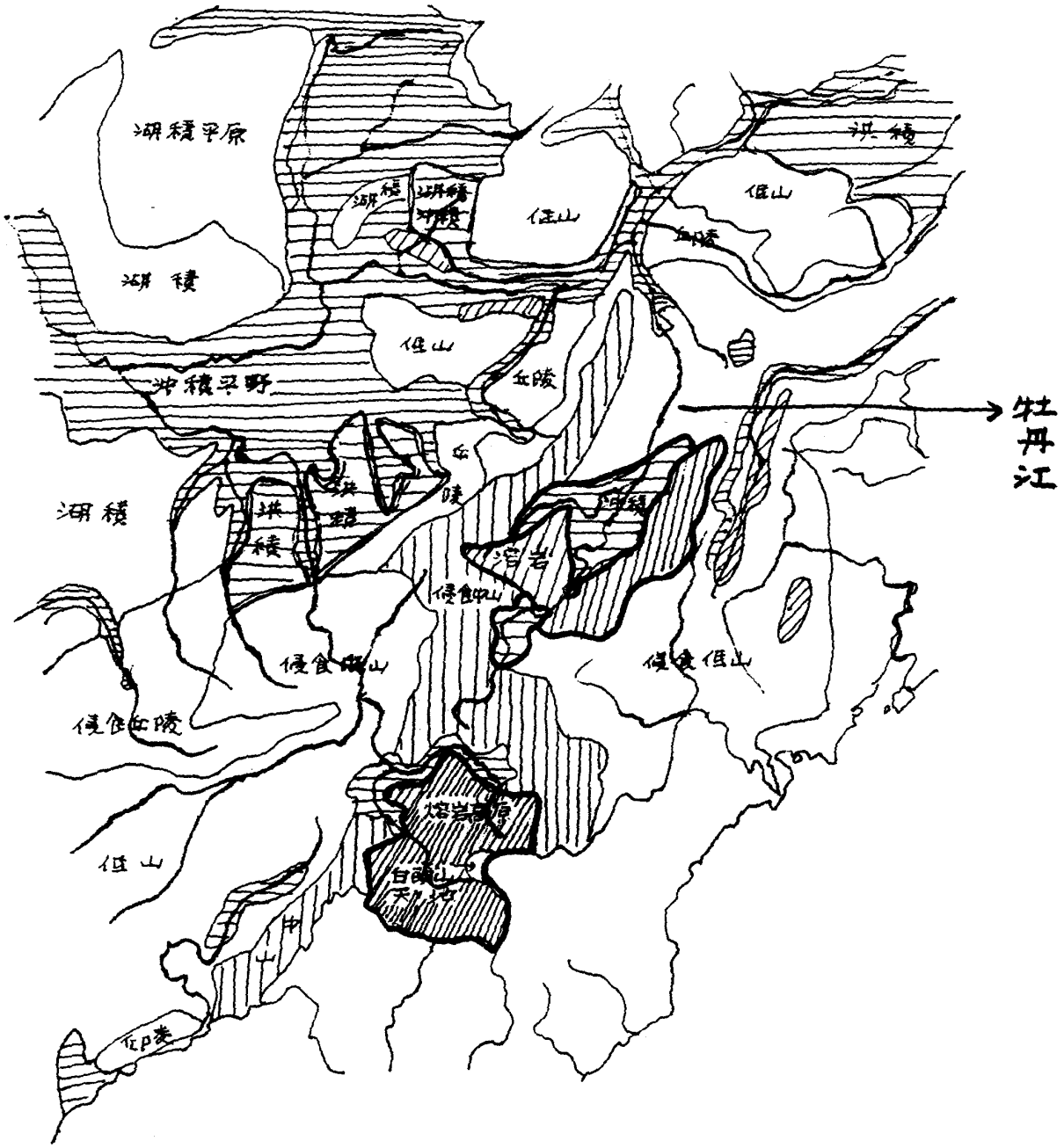
清の初めは三姓都統駐在の地としていたが，光緒32年（1906）依蘭府を設けている。この地はもともと「依蘭哈達（yilanhada）」と呼んでいた。満州語で「三」を依蘭といい，「姓」を哈達と発音していたのを仮借したものである。1914年には吉林省依蘭道に入っていたが，


黒竜江
松花江
倭
Woken he
肯
河
Mudan
Jiang
牡
丹
江
Hailin he
海 浪 河
Ningan
牡丹江
牡丹江
鏡泊湖
Jingpo hu
牡丹江

第21図
牡 丹 江

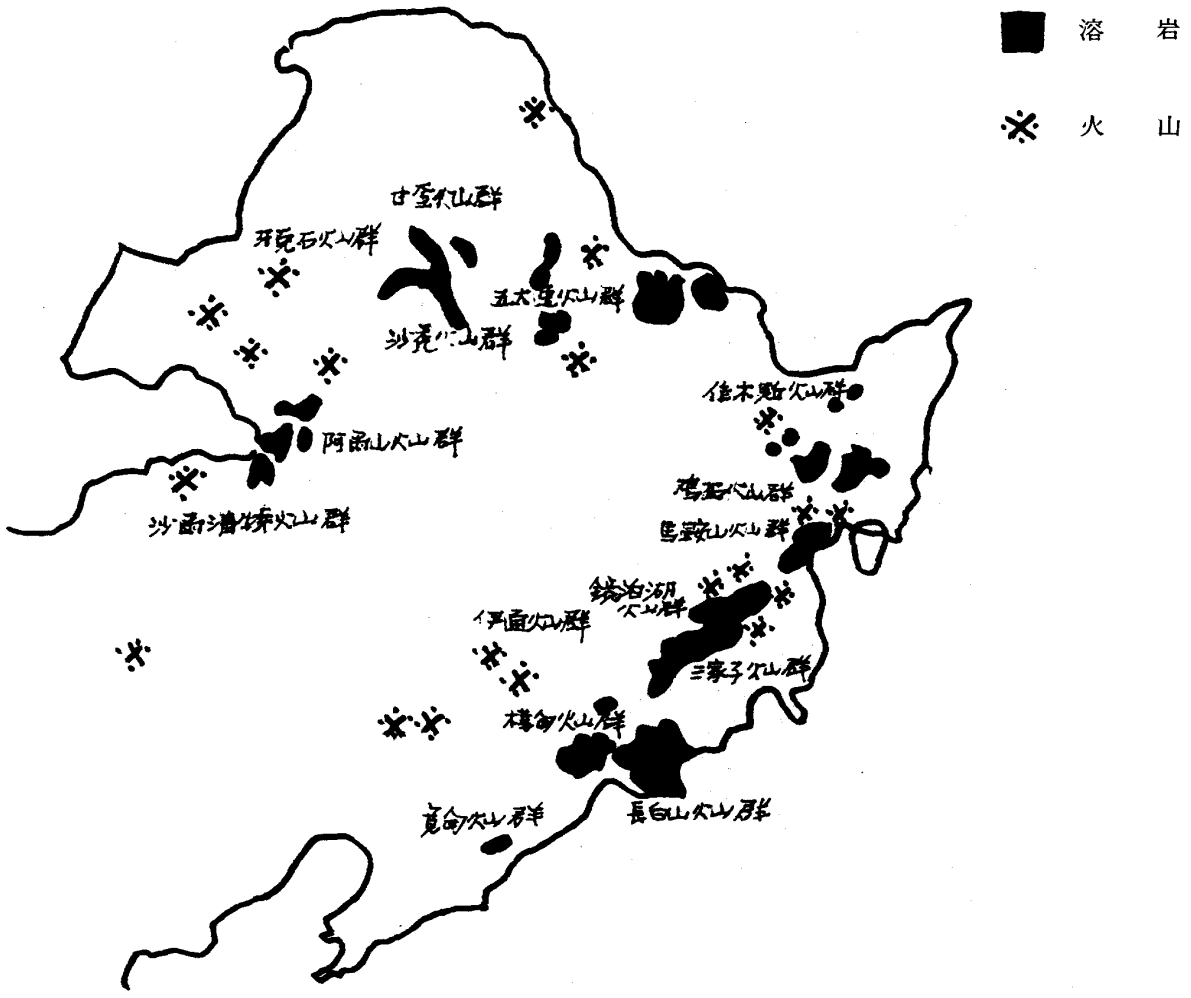
第22図

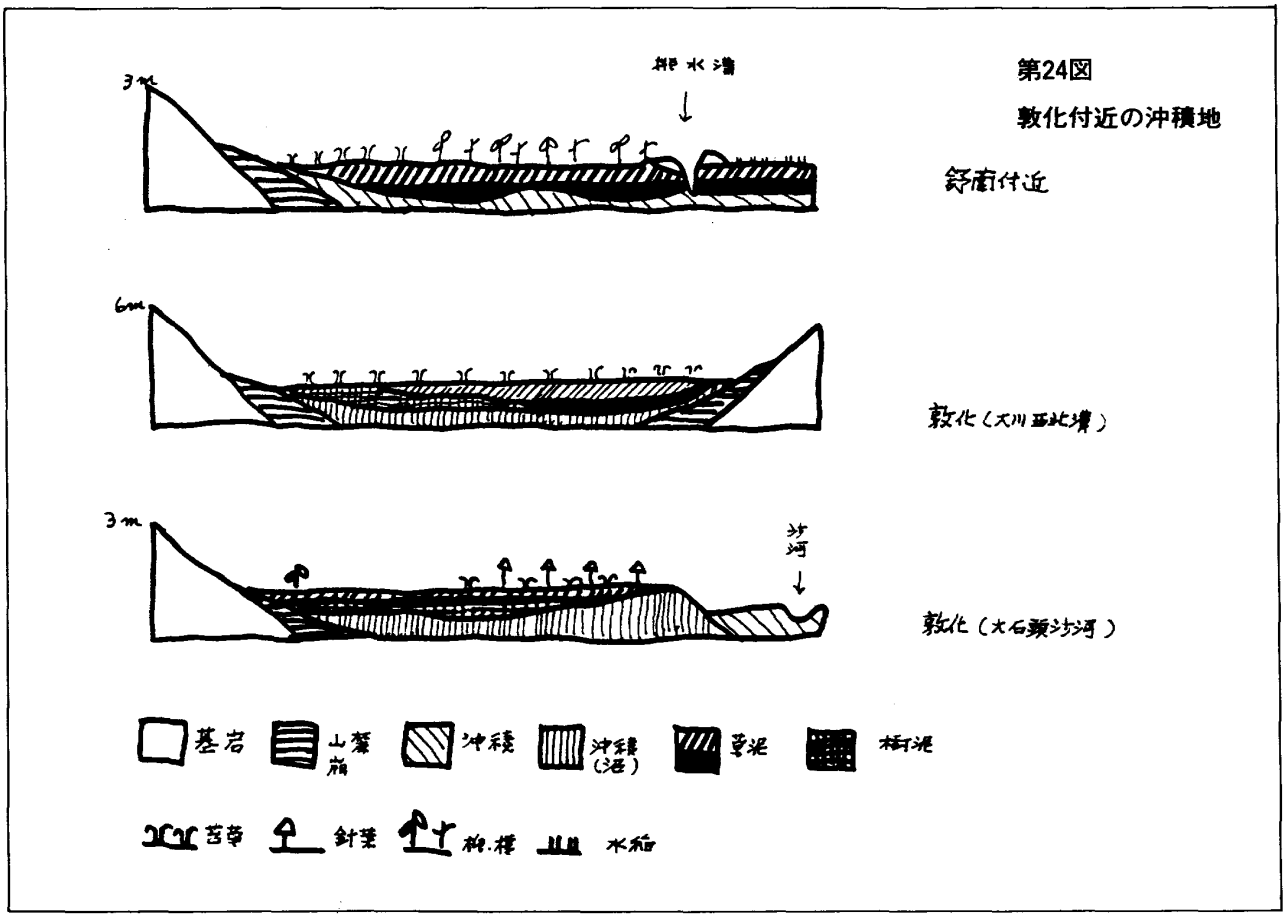
牡丹江流路



第23図

東北火山地


溶　岩
火　山
牙克石火山群
五大連火山群
阿蘭山火山群
沙蘭湖火山群
鶴岡火山群
馬鞍山火山群
錦泊湖火山群
伊春火山群
三家子火山群
樺甸火山群
長白山火山群
寛甸火山群



第24図
敦化付近の沖積地

その後黒竜江省合江地区に属している。牡丹江の全長725km，流域面積３万7,400km²，土砂が少く河質澄明として知られる。これらは一つに地形に関係があり，途中鏡白湖の溶岩地域で上流の土砂を濾過することによるものである。(第22図参照)

又，この牡丹江流域の民族興亡の激しさは敦化を中心とする良好なる沖積地なせる技で，各民族の生活の舞台としては最適の地でもあったのである。（第24図参照)

扨て，これらの沖積地へ流下する支流のいくつかを見てみることにする。

① 海浪河（hailong he)

金史・石顕伝には「孩懶水」とある。又，金史・世祖昭德皇后伝には「海羅伊河」とある。黒竜江興図説には，「海羅伊河」というが，「富爾澗河」とも呼称することがあるとしている。その後，「海蘭河」と呼んだり，「海浪河」といったりまちまちであったが，「海浪河」が残ったものである。「孩懶」や「海蘭」「海浪」は全て同音であって，満州語の「楡樹」から来ているといわれている。

張広戈嶺（zhangguangcailing）に源流を発している。小白山とも称する張広戈嶺は長白山系に属し海抜1,000m前後である。古い花崗岩体で峻厳である。南の螞蜒河と牡丹江系河川との分水嶺ともなっている。北東から南西に走行し，北は松花江の中流へ達し，松花江の支流である螞蚊河と牡丹江との分水もなしている。海浪河は上流で「一道」「二道」「三道」などの支流を合流させて，牡丹江市付近から牡丹江へ注ぎ込んでいる。この流路は牡丹江構造線と深い関係があるものと思われている。

② 鏡泊湖（jingpo he）

牡丹江の上流で，渤海都跡で渤海鎮とも称した震国から約30km南下した地点にある堰止湖である。湖内に珍珠門などの島をもっている。牡丹江の本流を溶岸が堰止めたのであるが，もともと多くの支流河川が流れ込んでいた地点でもある。今日でも「松吉」「柳樹」「阿布」などの河川が注ぎ込んでいる。南北に長く45km，東西の最大幅6km，湖面面積90km²，湖面の海抜高度は351m，最大深度60mある。堰止められたために落差が生じ，湖の北端（北湖頭）に吊水楼瀑布がある。落差20m，噴火口は鏡泊湖の西北にあって「地下森林」と呼んでいる。大小四つの噴火口は，最大のもので500m（直径）ある。深さ145m，噴火口全域森林に蔽われているところから「地下森林」という。

靺鞨族の国渤海時代から鏡泊湖は注目されて「忽汗海」といわれていた。明から清にかけては「畢爾騰湖」と呼称されている。これは満州語の「細い」で，「細い湖」といったことが語源である。別に「鏡の如き水面」の意味があるとされたので，清代以降は「鏡泊」を用いる事が多くなっている。この他に「発庫」とか「大湖」といった呼び名も用いられている。

③ 夾溪河（xiaqi he）

もと「札津河」とか「札珠河」とか称していた。上流は「大夾溪河」と「小夾溪河」に分かれているが，やがて合流して鏡泊湖の南頭湖へ流れ込んでいる。牡丹江の上流（鏡泊湖一帯の溶岩高原の南側地域）は敦化を中心とする沖積地である。（第24図参照）細流ではあるが大石頭から来入する「沙河」や西北岔から流入する「黄泥河」などで沼沢地を形成している。牡丹江が溶岩によって堰止められて背後が湖盆状になったものである。東北地方の火山活動は長白山から北へ延びて，各所に，この種の湖盆を形成している。（第23図参照）

④ 倭肯河（woken he）

古くは「発爾図渾河」と言われ，後には「倭抗河」「倭和江」などと表記を変えている。上流に「大金沙河」や「窩棚河」があり，「七台河（qitai he）」と併さっている。七台河のある勃利（boli）の地権は複雑で，唐が勃利州を設置して伯力・哈巴羅夫斯克（chabarovsk・khabarosk）に属させている。勃利の名称が出たが，露国は喀巴羅夫（khabarov）と改名している。勃利より西方の地は露国では「西伯利亜（siberian）と呼称することになった。その後には渤海国の地となり清となって依蘭府を置いている。倭肯河は丘陵を下る河である。松花江へ直接流入していて牡丹江の支流ではない。

8

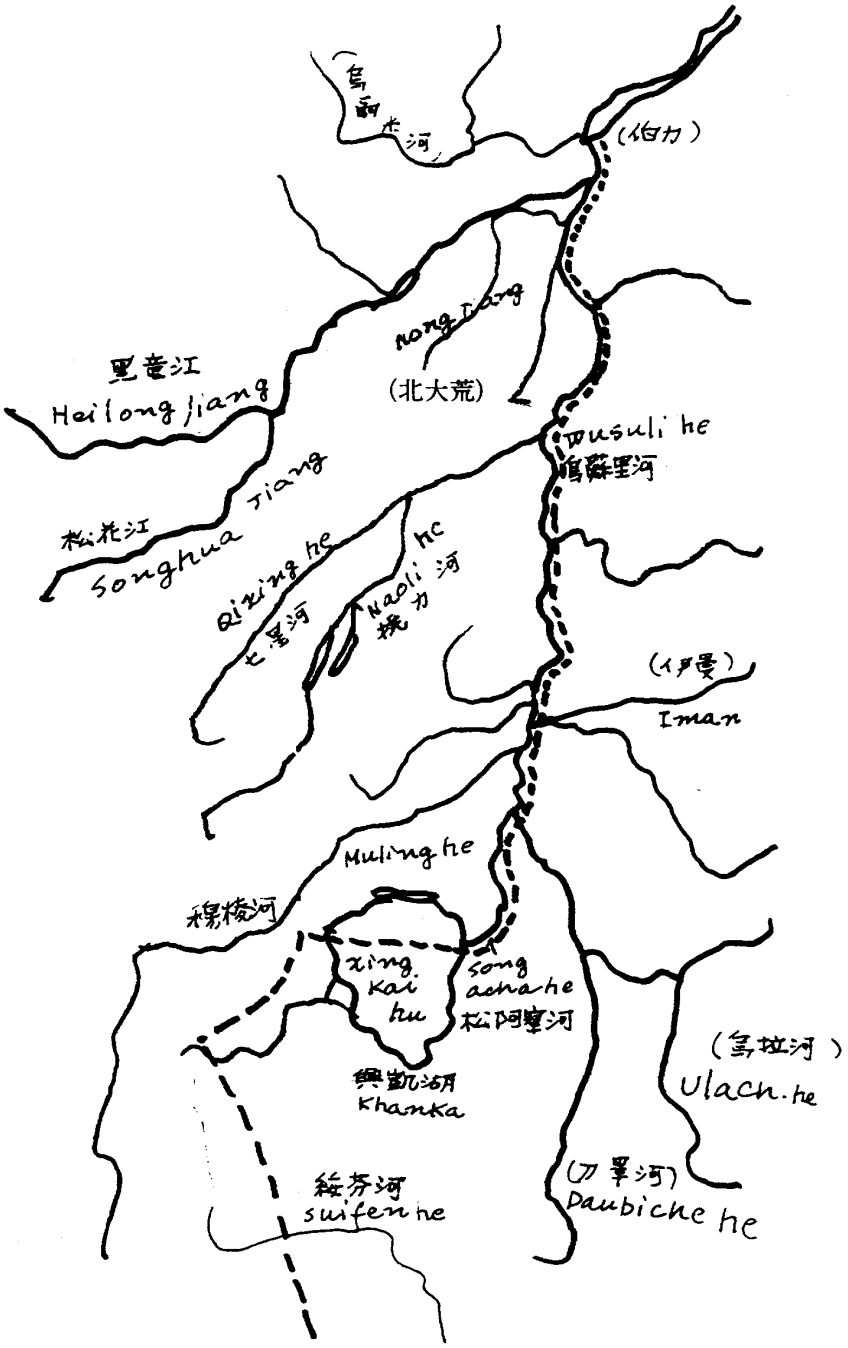
烏蘇里江（wusuli jiang・Ussur）と，その支流

黒竜江の支流で中ソ国境を流れる河である。上流はソ連領（Purimoruskiy）で，烏拉河（ula he・Ulache）と，刀畢河（Daubiche he）が合流して，烏蘇里江となる。合流地点には国境を流れる「松阿察河（songacha he）」などがあって競合状態を呈し沼沢地をなしている露語ではUssurjiskという。―skは地名語尾である。

明代には「亦速里河」と書かれている。清代に入って「烏蘇里江」となるが，一般化しなかったと見えて満州源流考には「鄂羅哩」とあったり，「烏図哩」とある。又，吉林通志には「烏蘇里」で統一してある。満州語で「天王」の意味であるとする説と，漢語で「順流而下」の意味があるとする説などがある。全長890km，流域の面積は18万7000km²ある。（第25図参照）

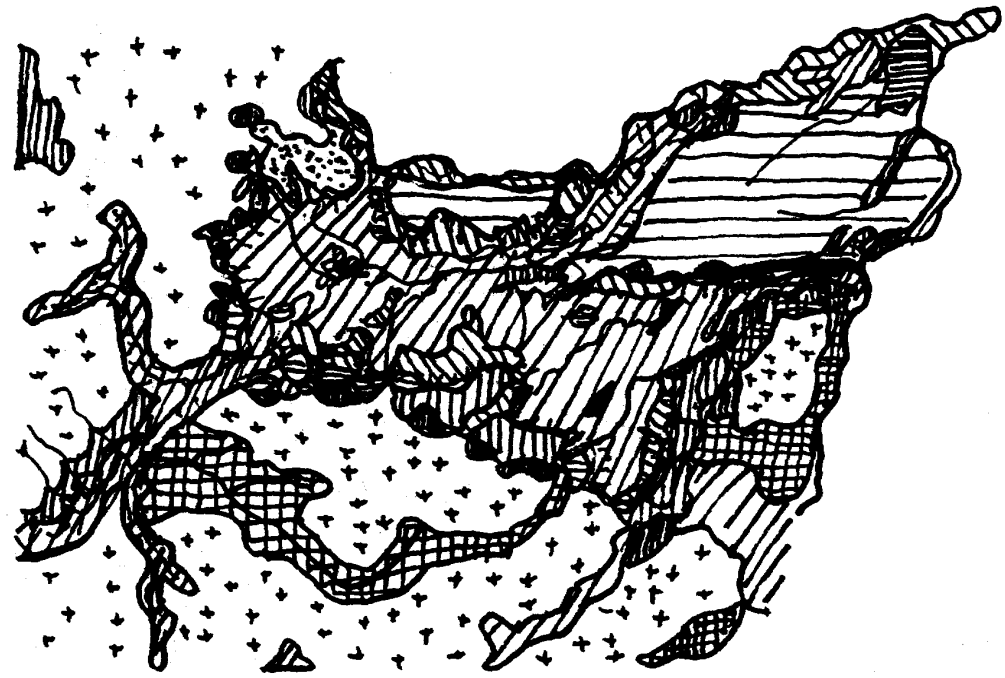
第25図

烏蘇里江


烏蘇里河
(伯力)
Nong Jiang
黒竜江
Heilongjiang
(北大荒)
Wusuli he
烏蘇里河
松花江
Songhua Jiang
Qiqing he
七星河
Naoli 河
(イマン)
Iman
Muling he
穆稜河
Xing Kai hu
Song acha he
松阿察河
興凱湖
Khanka
(烏拉河)
Ulach. he
綏芬河
Suifen he
(乃曼河)
Daubiche he

第26図

三江平野（北大荒）



河床低溢水

河床高溢水

第１段丘

第２段丘

撓力河堤坊

洪積傾斜

古扇状地

洪 積 地

丘　　陵

低山地帯

滞水地帯

この烏蘇里江と松花江，黒竜江の合流する一帯を「三江平野」と呼んでいる。(第26図参照)，大部分が「大酱缸」と言われる沼沢地である。解放後「北大荒」と呼称し開拓をはじめている。「北大荒」はもともと黒竜江省の別名であるが，特に狭義では「三江平野」を指していることが多い。最近は排水設備が行き届き「北大倉」とすらいわれるようになっている。

烏蘇里江は川巾が広く烏拉河口まで航行ができる。ただし結氷期間５ヶ月にわたる。

① 穆棱河（muling he）

源流は老嶺（Lao ling）山系にあって三俣になっている。合流して北上して「撈牛河」となり「大石頭河」となって，穆棱鎮から「穆棱河」となる。下流は泥炭化し「装德河（古くは溶装德里河という)」となり分流を重ねて烏蘇里江へ注がれている。

金代には「暮棱水」といい，明代に入いると「毛怜河」と称している。この後，麦蘭河衛を設置したこともあって「麦蘭河」といったこともある。清に入って「木倫河」や「穆棱河」を用いるようになっている。「暮棱」や「毛怜」「穆棱」などは各れも満州語の「馬」の音変化である。

② 松阿察河（songacha he）

興凱湖の東側の北岸より流出して，中ソ国境を北流する。途中多くの小河川を蒐めて泥炭地を流れ烏蘇里江と合流している。語源は満州語で「盔纓」といわれている。これは帽子或は甲の房のことである。

③ 撓力河（naoli he）

古くは「饒力河」と称していたといわれる。満州語の「諾雷」で，鳥の多く集るところの意味がある。湿地帯を流れため多重細流となり溢水となる。河巾が10kmになり５本の支流に岐かれ，22の屈曲をしているといわれている。中流では北からの七里泌河（七星河）と合流し大小の沼を形成する。

烏蘇里江と合流する地点は別に「佳河」と呼んでいる。河が分流するので「双流河」と呼ぶこともある。分流河の間に，中島が生れるので「大興島」「小興島」などの地名が生れたりしている。

北大荒の地域である。かつて，宝清県の東部へ日本の開拓団８団体が入植したことがある。プロ文革の前後，国内の「右派」の人々を入植させたことがある。その後改良が加えられて近代的な農業地帯と生れ変っている。

④ 興凱湖（xingkai hu・khanka）

中ソ国境にある。湖の北部は中国領，南部はソ連領である。面積4,380km²，海抜69ｍである。深度は10ｍ，湖の北東から松阿察河を流出し，烏蘇里江へ注いでいる。湖の周辺は沼沢地，北西やや峻しく，北に小興凱湖があって，１km幅の砂提で遮断されている。増水期には興凱湖と一つになる。火山性の爆発によって陥没して形成された湖である。

小興凱湖は「達巴庫湖」とも言っている。唐代には「漏沱湖」と称している。渤海は，この地に沱州を設置している。遼及び金代は「北琴海」と言っている。清代の初めに「興凱湖」が用いられる。語源は満州語の意訳といわれ，「高所へ水の流れる処」とされている。時には「新開湖」や「興開湖」と呼ばれることもある。ソ連は khanka を用いている。湖の全体の形は隋円である。古来九河注ぐといい，周辺より常に細流が流れ込んでいる。

なお，烏蘇里江中にある珍宝島で1969年３月中ソ両軍が衝突したことがある。中ソ両軍の死者は合計100人以上に達したと伝えられている。世に云う「珍宝島事件（zhenbao dao shijian）である。

⑤　綏芬河（suifen he）

烏蘇里江の支流ではなく，独立河川で上流は中国領，下流はソ連領で国境に分断された河である。

下流はソ連領の烏蘇里斯克（古くは双城子・Ussurijisk・shuangchengzi・vladivostok）である。源流は二つになっていて，南源は綏芬河と呼称し，吉林省東部の盤嶺にあって，一旦北流してから南下する。ここで，北から来る源流の小綏芬河と合流し，東に折れて東寧（tung ning・dongning）の三岔口で，南から来た支流の「瑚布図河」と合流して，ソ連領の海浜口から海へ出る。

唐代には「率賓水」といっている。渤海国は河名に因み率賓府を設置している。金代に入いると，「恤品水」や「速瀕水」が用いられている。時には「蘇浜水」を用いることもあった。

明代も同様に「恤品水」を用い，「速平江」や「速江平」といった表現も用いている。清代の初めになって「綏芬河」が定着をはじめている。「率賓」「恤品」「速瀕」「蘇浜」などは同音で，女真語や満州語でいう「雉子」のことである。

上流は渓谷で周辺は森林地帯であって「大石頭河」「老田猪河」などの清流が流れ込んでいる急流があることで知られている。